飯氏遺跡群 4

－第10次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第922集

2007

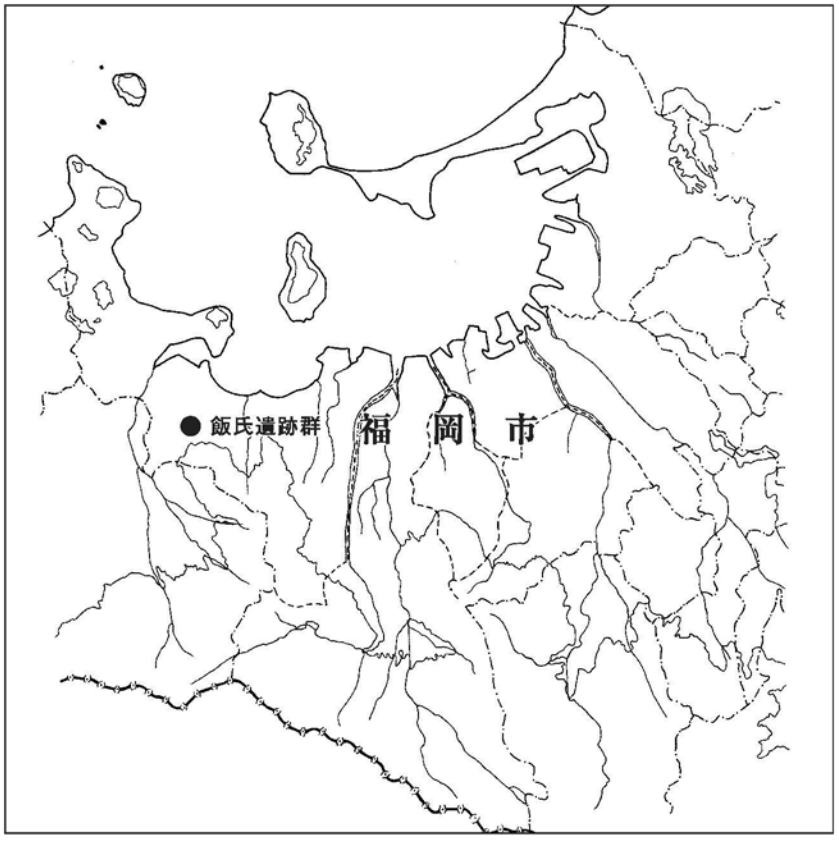
福岡市教育委員会

いいじ

飯氏遺跡群 4

－第10次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第922集



調査番号　０５０７
遺跡略号　IIJ－10

２００７
福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えてきた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めているところです。

本書で報告いたします飯氏遺跡群では、これまでに弥生時代の住居や甕棺墓、古墳や古墳時代の住居などが調査されており、当時の生活用具であるたくさんの土器や石器が出土しています。

今回の調査でも弥生時代の甕棺墓や、弥生時代から古墳時代にかけての掘立柱建物などが発見され、この地域の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いに存じます。

平成19年３月30日

福岡市教育委員会
教育長　**植木　　とみ子**

例　　言

1．本書は、福岡市西区大字飯氏876－1における公民館建設に伴い、福岡市教育委員会が2005（平成17）年４月13日から６月29日にかけて発掘調査を実施した飯氏（いいじ）遺跡群第10次調査の報告書である。

2．遺構の呼称は記号化し、掘立柱建物→ＳＢ、溝→ＳＤ、土坑・土壙墓・木棺墓→ＳＫ、ピット→ＳＰ、甕棺墓→ＳＴ、遺物集中部→ＳＸとした。遺構番号はピットを除いて種類に関係なく連番とした。

3．本書に使用した遺構実測図は田上勇一郎が作成した。遺物実測図は森本幹彦（本市埋蔵文化財第２課）、田上が作成した。製図は大庭友子、成清直子、田上があたった。

4．本書に使用した写真は田上が撮影した。

5．本書に使用した標高は海抜高である。

6．本書に使用した方位は磁北である。本地域では真北に対し6°18′西偏する。

7．本書の執筆は森本、田上がおこない。編集は田上がおこなった。

8．本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・公開される予定である。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1．調査にいたる経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
　3．調査地点の立地と環境 …… 2

Ⅱ　調査の記録 …… 5
　1．調査の経過と概要 …… 5
　2．発見された遺構と遺物 …… 8
　　（1）　甕棺墓 …… 8
　　（2）　木棺墓・土壙墓 …… 20
　　（3）　掘立柱建物 …… 24
　　（4）　土坑 …… 29
　　（5）　遺物集中部 …… 35
　　（6）　ピット出土遺物 …… 39
　　（7）　その他の土器・土製品 …… 41
　　（8）　石器・石製品・ガラス製品 …… 42

Ⅲ　まとめ …… 44

調査番号	０５０７		遺跡略号	ＩＩＪ－１０	
調査地地積	西区大字飯氏８７６－１		分布地図番号	周船寺　１２０	
開発面積	1,131㎡	調査対象面積	928㎡	調査面積	928㎡
調査期間	2005年（平成17年）４月13日～６月29日				

Ⅰ　はじめに

１．調査にいたる経緯

2004（平成16）年６月18日付けで、市民局コミュニティ推進部公民館整備課から福岡市西区大字飯氏876－１における公民館改築事業に伴う埋蔵文化財の事前審査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、申請地が飯氏遺跡群の範囲内であることから、試掘調査が必要と判断した。試掘調査は同年７月28日に実施し、対象地に遺構が存在することが確認された。そこで、試掘調査の結果をふまえ、申請者と遺跡の取り扱いについて協議を重ね、建築工事によって破壊される部分を対象に本調査を実施することで合意に達した。現地での発掘調査は2005（平成17）年４月13日より６月29日まで土地を造成する福岡市土地開発公社からの受託事業として実施した。整理作業と報告書の刊行は2006（平成18）年度に福岡市市民局コミュニティ推進部公民館整備課からの令達事業としておこなった。

２．調査の組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

平成17年度

調査委託　福岡市土地開発公社

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	植木とみ子
調査総括	埋蔵文化財課	課長	山口譲治
		調査第１係長	山崎龍雄
調査庶務	文化財整備課	管理係	後藤泰子
事前協議	埋蔵文化財課	事前審査係長	濱石哲也
		事前審査係	井上繭子
調査担当	埋蔵文化財課	調査第１係	田上勇一郎

調査作業　青木和代　青木隆治　青木真孝　青木泰生　有江笑子　上野道郎　岡部静江　海津宏子
金子由利子　指山歌子　佐藤直利　柴田勝子　柴田春代　染井美保子　永島重俊
西納富士夫　平井和子　堀川ヒロ子　三村悦子　山本キミ子

平成18年度

事業主体　福岡市市民局コミュニティ推進部公民館整備課

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	植木とみ子
調査総括	埋蔵文化財第２課	課長	力武卓治
		調査第２係長	米倉秀紀
調査庶務	文化財管理課	管理係	後藤泰子
事前協議	埋蔵文化財第１課	事前審査係長	濱石哲也
		事前審査係	星野恵美
整理担当	埋蔵文化財センター		田上勇一郎

整理作業　牛尾功仁子　大庭友子　尾崎京子　川嶋千鶴　川田京子　倉光恵美子　迫田裕子
成清直子　山口とし子　和田富美子

３．調査地点の立地と環境　（Fig.１～３）

飯氏遺跡群は福岡市の西部、糸島平野と今宿平野を画す山塊の高祖山からのびる丘陵裾および扇状地に位置する。北・西は瑞梅寺川の支流である周船寺川で、東は周船寺川支流の谷響川が形成した谷で画され、南は高祖山の山裾までの東西600m、南北800mの範囲に広がる。遺跡群の南部には前方後円墳である飯氏二塚古墳や兜塚古墳がある飯氏古墳群Ａ群が含まれる。

飯氏遺跡群ではこれまで10次にわたる調査がおこなわれており、縄文時代晩期の埋甕、弥生時代中期の集落、弥生時代前期後半から後期にかけての150基近い甕棺や土壙墓、木棺墓、石棺墓といった墓地、弥生時代終末から古墳時代の70軒件以上の竪穴住居や40棟以上の掘立柱建物が検出された集落などが調査されている。

このうち今回の調査地点に近い調査地点の概要を示す。

南方180mには県教育委員会調査の１次調査地点（飯氏馬場遺跡）がある。弥生時代前期末～中期初頭の円形竪穴住居１軒、前期後半から後期にかけての甕棺墓９基や木棺墓４基、石棺墓３基、中世の土壙墓７基が調査された。このうち３号石棺墓の抜き跡から小型方製内行花文鏡が出土している。そのすぐ北側、10次調査地点の南方140mには３次調査Ⅱ区がある。ここでは弥生時代前期末～中期初頭の甕棺墓23基、弥生時代後期の甕棺墓６基が出土した。７号甕棺墓からは雲雷文内行花文鏡、８号甕棺墓からは平縁の舶載鏡片が出土している。

南西80mには６次調査と３次調査Ⅰ区がある。３次調査Ⅰ区では縄文時代晩期の埋甕５基、弥生時代中期中頃～後期初頭の甕棺19基、弥生時代終末～古墳時代の竪穴住居59軒、土壙45基などが検出された。甕棺は調査区西側に偏って分布している。また、集落は古墳時代前期が最盛期となる。この北

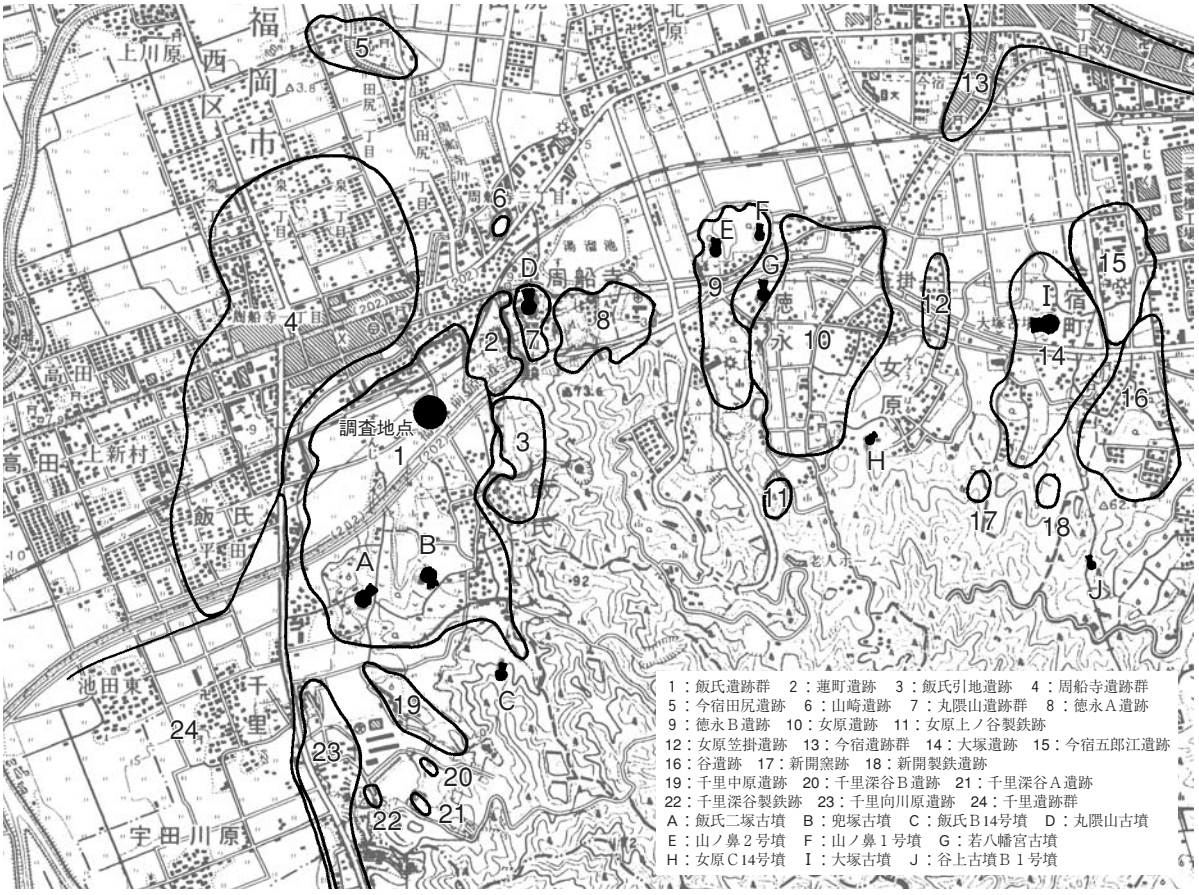


Fig.１　飯氏遺跡群と調査地点の位置　（1/25,000）

側、６次調査１地点では縄文時代晩期埋甕３基、弥生時代後期の竪穴住居１軒、掘立柱建物27棟などが、３次調査Ⅰ区の南側、６次調査３地点では縄文時代晩期の壺棺１基、弥生時代甕棺墓９基、古墳時代の竪穴住居８軒が調査されている。

北方120mには９次調査地点がある。弥生時代中期後半の土器を大量に出土した溝が２条、中期と考えられる掘立柱建物２棟が調査された。溝は集落を囲む環濠の可能性がある。

今回の調査地点は遺跡の北部にあたり、緩やかに北に傾斜している。客土されており、現標高は13.8m前後であるが、客土されていない西側隣地の畑は標高12.8mである。

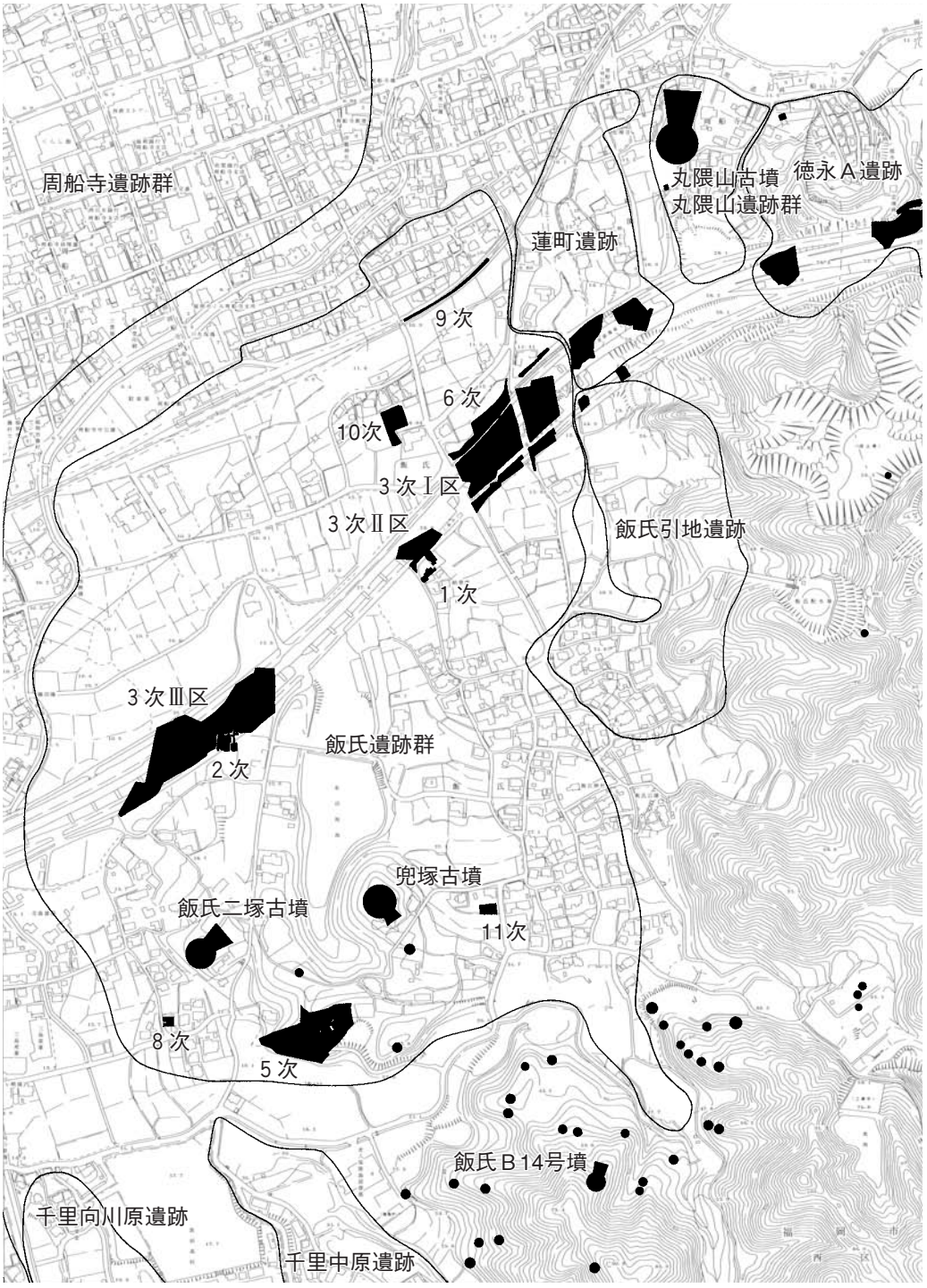
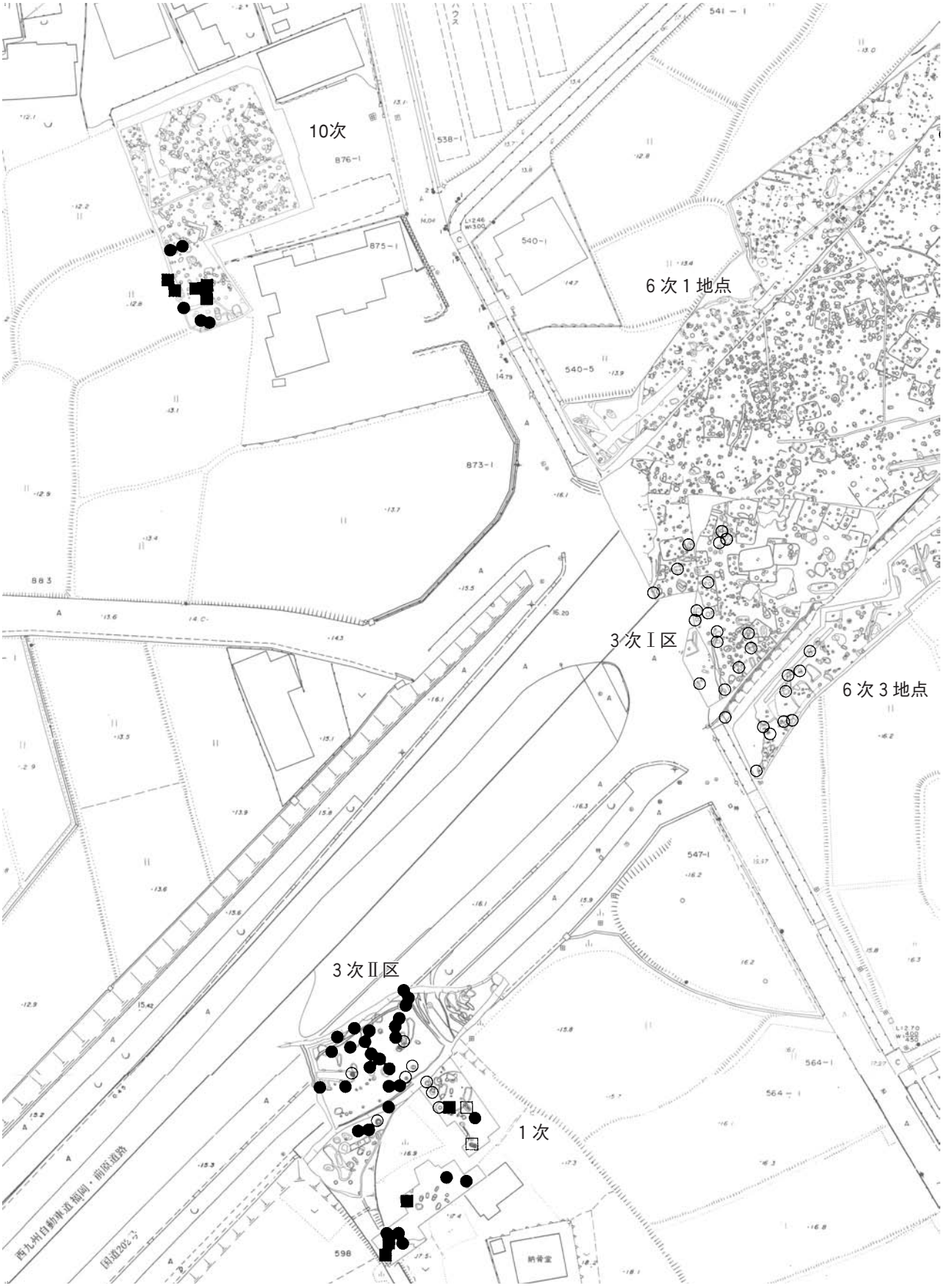


Fig. 2　調査地点と周辺の調査区　(1/8,000)



○は甕棺、□は土壙墓、木棺墓、石棺墓
黒塗りは弥生時代前期末～中期初頭。白抜きはその他の時期

Fig. 3　調査区位置図　(1/1,000)

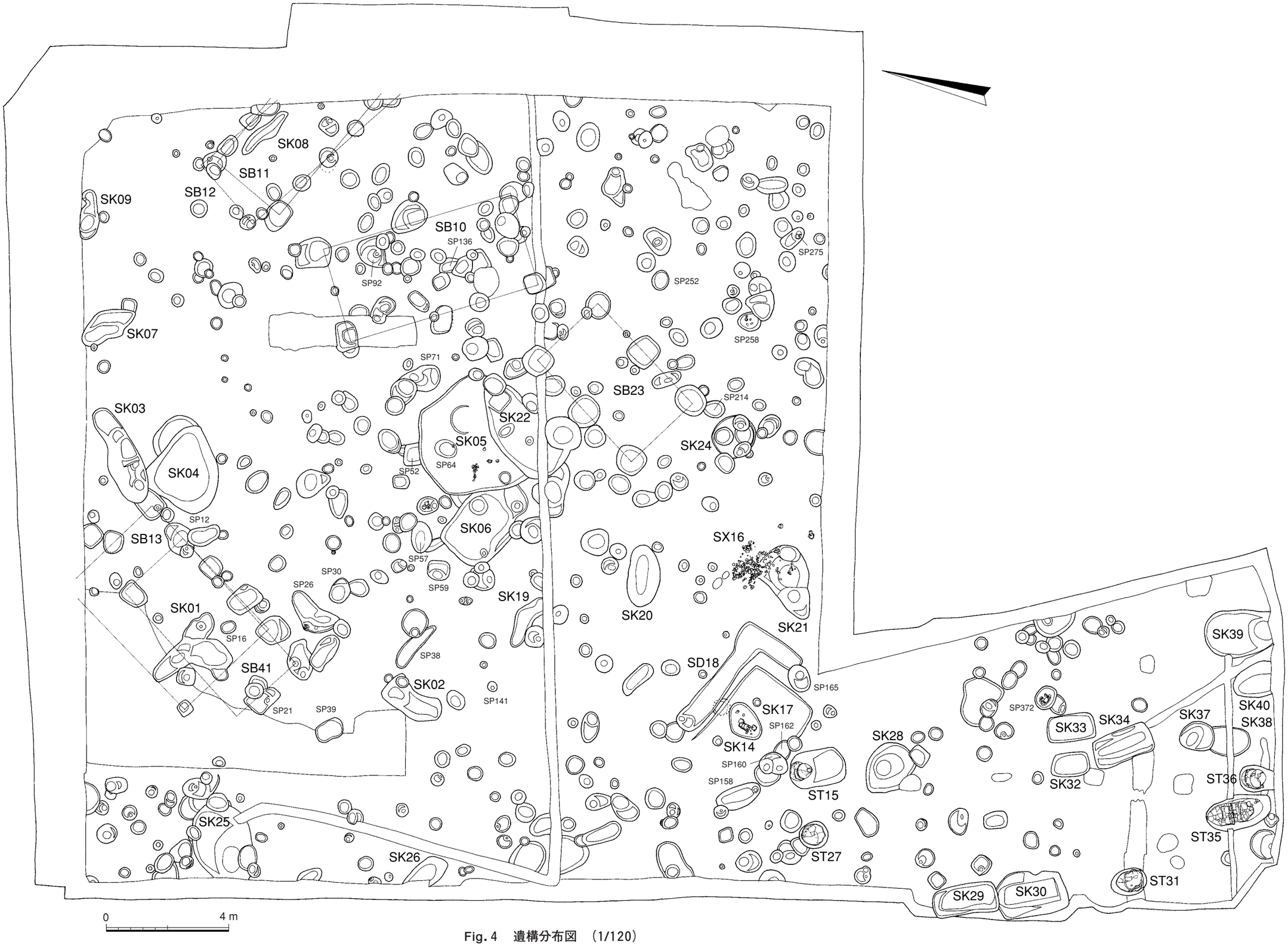


Fig. 4　遺構分布図　(1/120)

Ⅱ　調　査　の　記　録

１．調査の経過と概要　（Fig.４・５、Ph.１～４）

調査は建物予定範囲525㎡を対象として開始した。排土置き場の確保のため南北２分割で調査をおこなうこととし、2005（平成17）年４月13日、まず北側から着手した（Ａ区）。北西隅より重機で掘り下げを開始したが、最初の部分は掘りすぎてしまった。４月18日に表土除去が終了した。現地表面から1.8～2.6ｍほど下げると青白色シルトもしくは暗灰色粗砂になり、暗灰色や灰黒色を覆土とする遺構が検出できた。湧水があったため、調査区壁際に排水溝を掘削し、ポンプで水をあげながらの調査となった。不整形な土坑や柱穴のみで出土遺物はあまり多くなかった。５月２日に全景写真を撮る予定であったが、清掃が終了せず、翌３日の祝日に撮影をおこなった。５月９日にＡ区の調査を終了、埋め戻し、続いて南側の調査を開始した（Ｂ区）。重機で掘削中に調査区南西端で甕棺の底部にあたり破損させた。Ｂ区では湧水はなかった。甕棺１基と遺物集中部があり、調査にやや時間をとった。６月８日全景写真を撮影し、６月９日に調査を終え、翌10日より重機で埋め戻しをおこなった。

調査中に西側、南側に設置する擁壁が遺構面まで達することがわかり、引き続き追加調査をおこなった（Ｃ区）。甕棺が４基、土壙墓・木棺墓が５基あり、追加調査部分の内容が一番濃かった。６月27日にＣ区の調査を終了し、埋め戻しを開始した。６月29日機材などを撤収し、現地での全調査を終了した。最終的な調査面積は928㎡となった。

検出した遺構は掘立柱建物６棟、甕棺墓５基、木棺墓・土壙墓５基、甕棺抜き取り坑１基、土坑22基、溝１条である。遺物は弥生時代中期～終末の弥生土器、古墳時代初頭の土師器と弥生時代甕棺を中心に出土している。

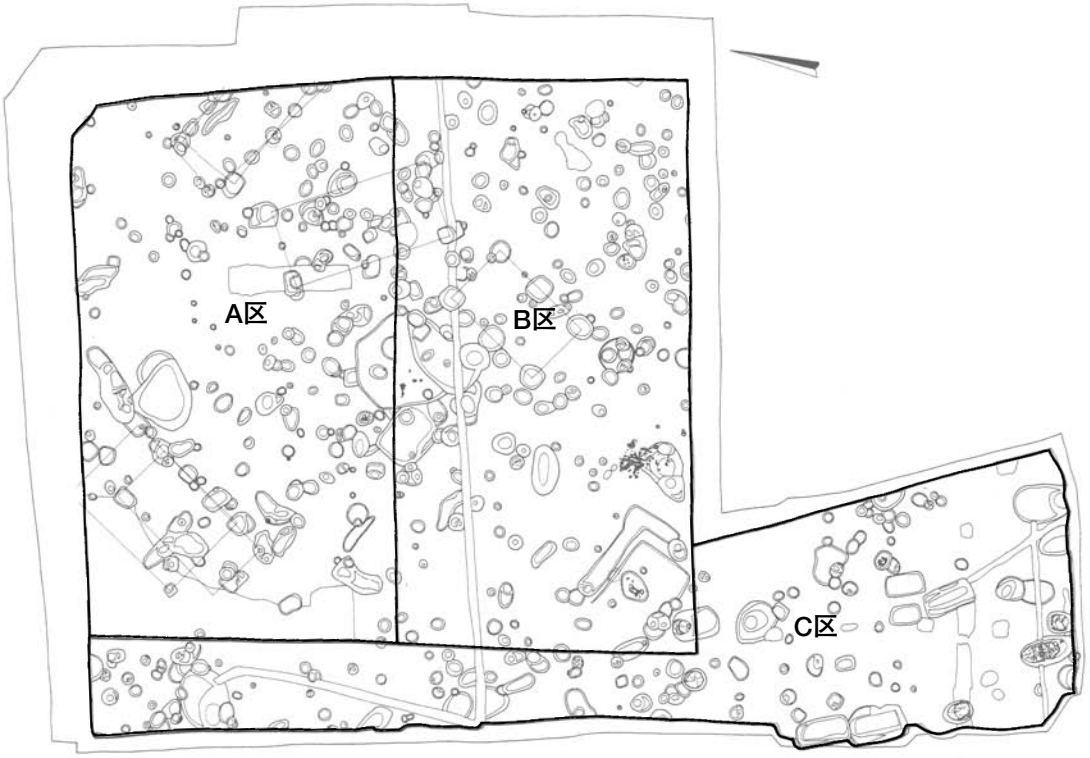
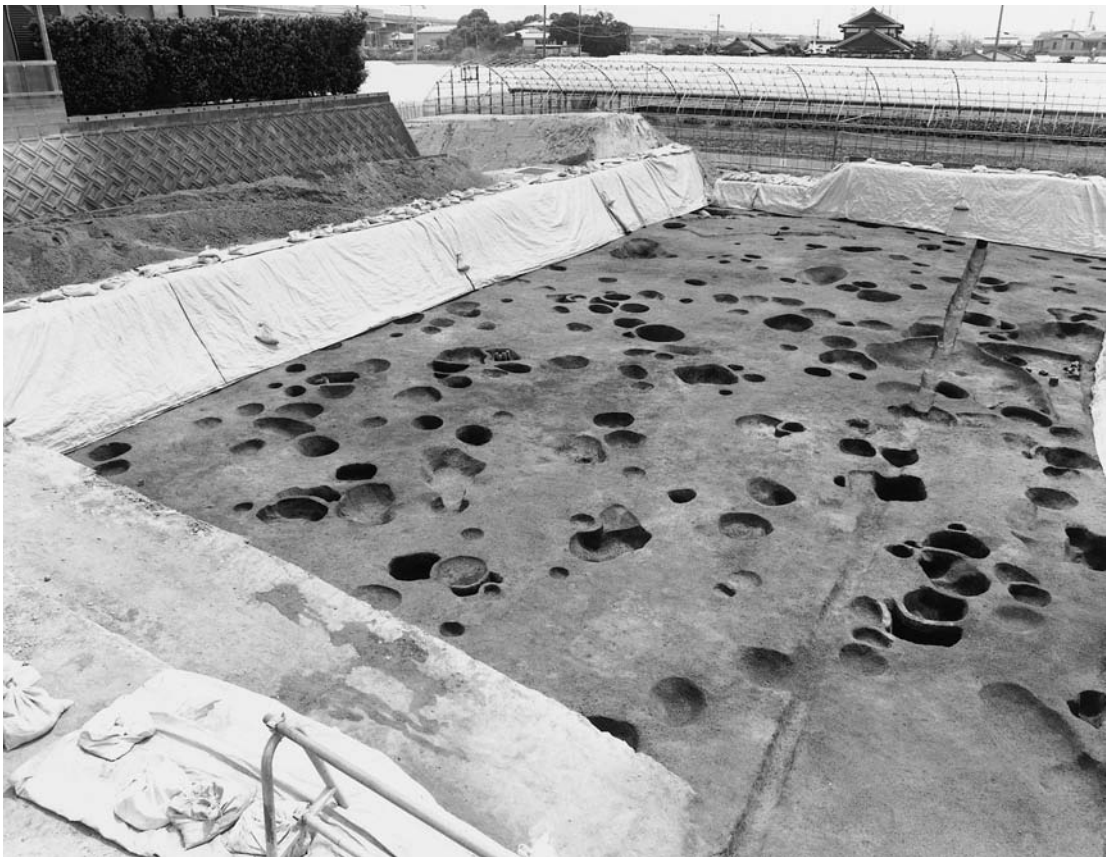


Fig.５　調査区割図　（1/300）



Ph. 1　B区全景　（東から）

Ph. 2　C区南側全景　（北から）

Ph. 3　A区全景　（東から）

Ph. 4　C区北側全景　（北から）

２．発見された遺構と遺物

（１）　甕棺

調査区の南西部で弥生時代前期末～中期初頭の甕棺が５基検出された。主軸はほぼ南北方向であるが、上下の向きは統一されていない。

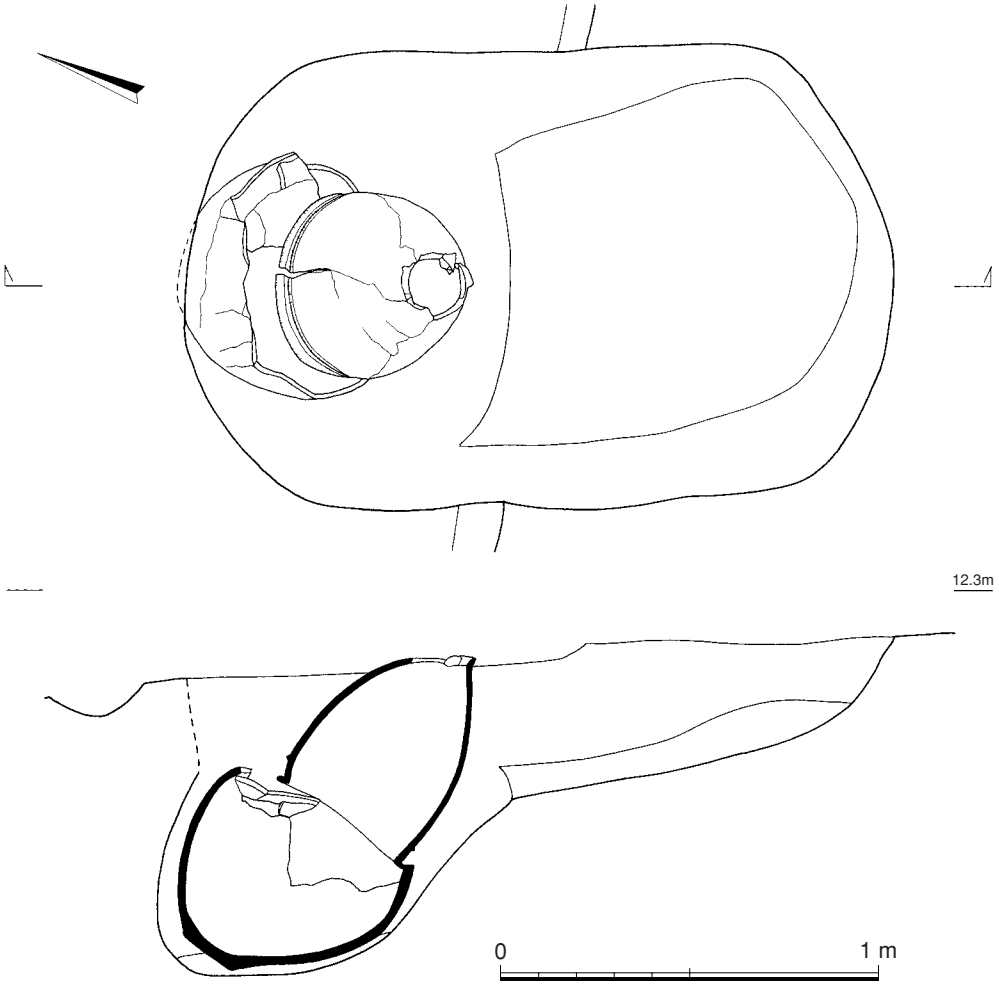


Fig.6　ＳＴ１５実測図　(1/20)

Ph.5　ＳＴ１５　（北から）

Ph.6　ＳＴ１５掘方　（西から）

ＳＴ１５　（Fig.６・７、Ph.５～７）

Ｂ区の南西端で検出した。重機で掘削中に上棺の底部に当たり確認されたため、底部が欠損している。上棺に甕、下棺に壺を利用する。主軸はN－158°－E、埋置角は54°である。堀方はＣ区にのびており、長軸1.9m、短軸1.2mの楕円形であるが、北側はオーバーハングして掘り込んでいたと思われ、長軸はもう少し短いものと思われる。南側は一段掘りしている。深さは80cm。

Ph.７　ＳＴ１５　（西から）

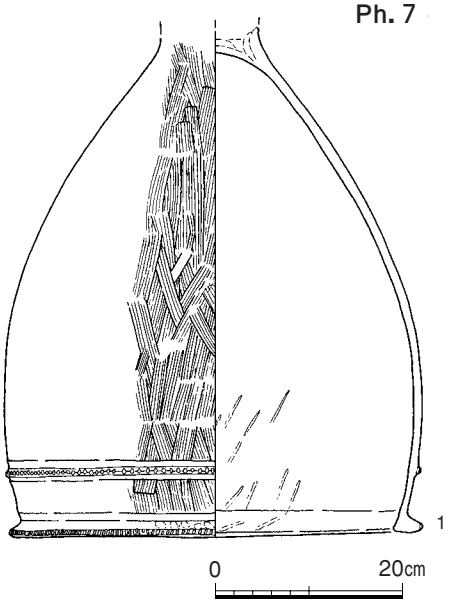


Fig.７　ＳＴ１５甕棺実測図　（1/8）

Ph.８　ＳＴ１５甕棺　（約1/10）

１は上棺で甕である。口縁下に突帯があり、刻みを入れる。口縁部にも刻みがはいる。胴部は目の粗いタテハケを密に施す。胴部上半は暗褐色、下半は暗赤褐色を呈し、胎土に径１～５㎜の石英・長石主体の砂粒を多く含む。口径44.0㎝、残存高53.7㎝。

下棺は壺である。焼きが甘かったのか、粘土化しており、取り上げたものの復元できなかった。口縁は打ち欠かれている。体部は横方向のミガキが施されている。赤橙色を呈し胎土に砂粒を大量に含む。出土時の実測での胴部径は58㎝、残存高54㎝である。

ＳＴ２７（Fig.８・９、Ph.９・10）

Ｃ区の中央で検出した。上部はかなり削平されている。下棺のみであったのか、上棺は削平され

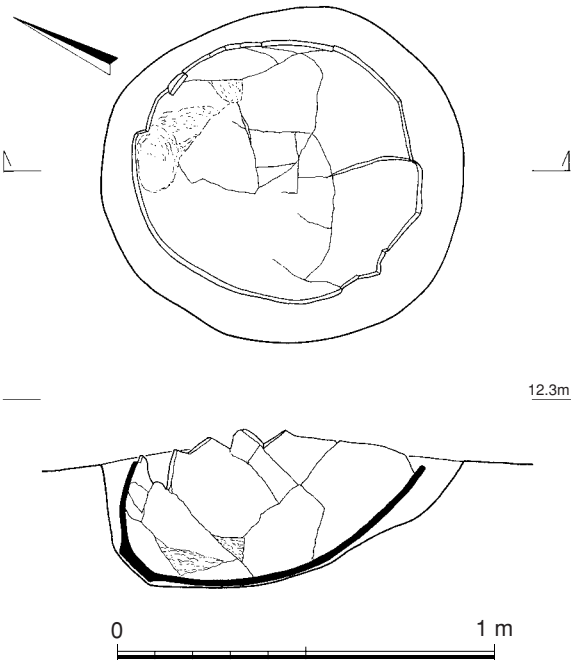


Fig.８　ＳＴ２７実測図　(1/20)

Ph.９　ＳＴ２７　(西から)

てしまったのかわからない。主軸はN−154°−E、埋置角は45°である。残存する堀方は長軸0.95m、短軸0.9mの楕円形で深さ35cm。

2は下棺で甕である。上部をかなり削平されている。胴部に沈線を施文し、その後その上部に三角突帯をナデ付ける。全面ナデ調整で、外面底部付近にハケが残る。焼きが甘かったのか、粘土化し底部は残存しない。復元胴部最大径66.0cm、底径9.0cm、残存高81.5cm。赤褐色〜橙色を呈し、胎土に径１〜４mmの砂粒を多く含む。

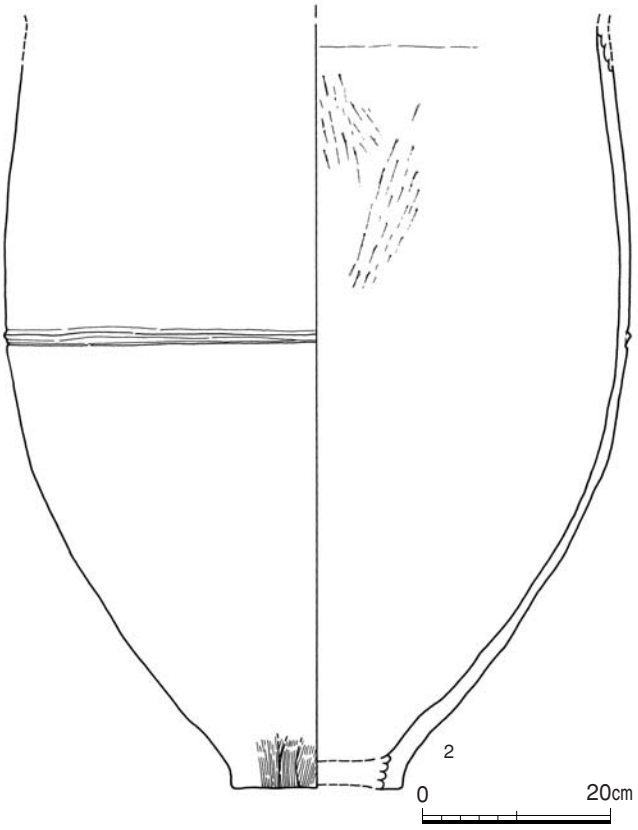


Fig. 9　ＳＴ２７甕棺実測図　(1/8)

ＳＴ３１（Fig.10・11、Ph.11・12）

Ｃ区南部の西端で検出した。上部は削平と撹乱を受けており、上棺の底部と胴部の半分以上は残存しない。上棺・下棺とも甕を利用する。上棺が下棺を呑む呑口式である。主軸はN−22°−E、埋置角は36°である。残存する堀方は長軸1.2m、短軸0.9mの楕円形で深さは65cm。

3は上棺で甕である。口縁端部上面に厚い粘土帯を貼り付け、内側へ張り出させる。内外面ともナデ調整だが、外面頸部や口縁平坦面、内面の一部にハケが残る。口径70.0cm、残存高64.0cm。淡褐色〜赤褐色を呈し、胎土に径１〜５mmの砂粒を多く含む。

4は下棺で甕である。口縁端部上面に厚い粘土帯を貼り付け、内側へ張り出させる。頸部に３条の沈線を１本ずつ施文し、胴部にも３条を意識したとみられる沈線を２単位巡らす。その間に縦方向の沈線を３条１単位で縦方向に５単位施文する。内外面ともナデ調整を施す。赤褐色を呈し、胎土に径１〜７mmの石英・長石・灰色砂粒を多く含む。口径57.0cm、器高78.2cm、底径12.5cm。

Ph.10　ＳＴ２７甕棺　(約1/10)

ＳＴ３５（Fig.12・13、Ph.13～17）

Ｃ区南端で検出した。ほぼ水平に埋置してあるが、堀方の南側の空間が大きいので南側を上棺とみた。上棺・下棺とも甕を利用する。下棺が上棺を呑む呑口式である。主軸はN－156°－Eで、上棺と下棺の底部を結んだ線で測った埋置角は－５°である。残存する堀方は長軸1.2m、短軸0.9mの楕円形で深さは65㎝。調査時に気づかなかったが、上甕に径18㎝の大きめの穿孔がある。写真で確認すると孔は東側面部に位置する。その部分には別個体の甕の破片が分布しており、孔をふさいでいたのかもしれない。

5は上棺で甕である。胴部下半に内側から打ち割って穿孔する。口縁部は鋤先口縁。口縁下と胴部に横方向の沈線をらせん状に２周させる。胴部沈線の下にも沈線がみられるが、ナデ消されている。

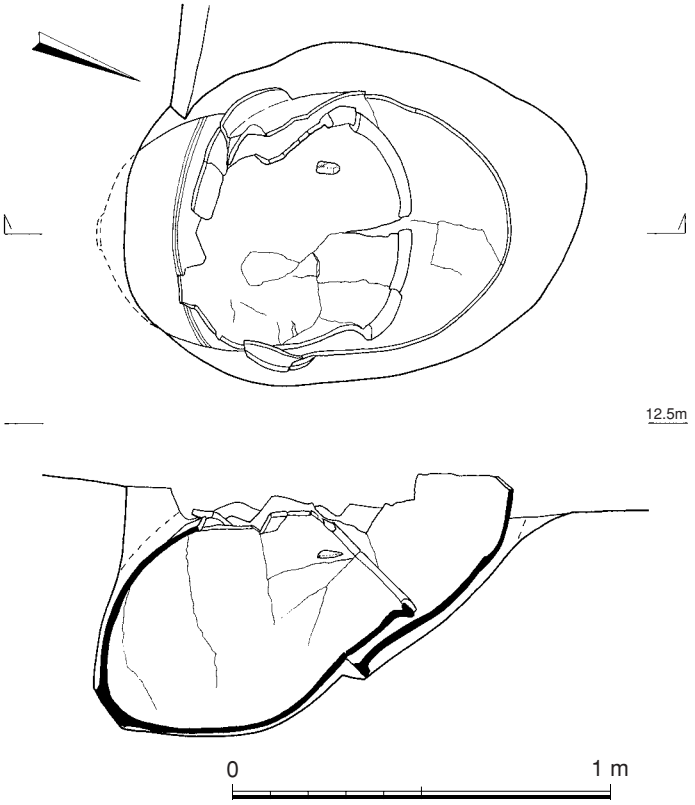


Fig.10　ＳＴ３１実測図　(1/20)

Ph.11　ＳＴ３１　(東から)

内外面ともナデ調整だが、外面底部付近と胴部の一部にハケが残る。淡赤褐色を呈し、胎土に径３㎜前後の石英・長石を主体とした砂粒を多く含む。口径52.0㎝、底径11.0㎝、器高74.3㎝。

6 は下棺で甕である。口縁は逆Ｌ字状で、端部にハケ工具の刺突で刻目を入れる。口縁下には横方向の沈線をらせん状に２周させ、胴部中位には横方向の沈線を２条巡らす。外面は胴部上半ヨコナデ、下半は縦方向のナデを施し、底部付近はハケ調整をおこなう。内面は口縁付近がヨコナデ、以下は斜

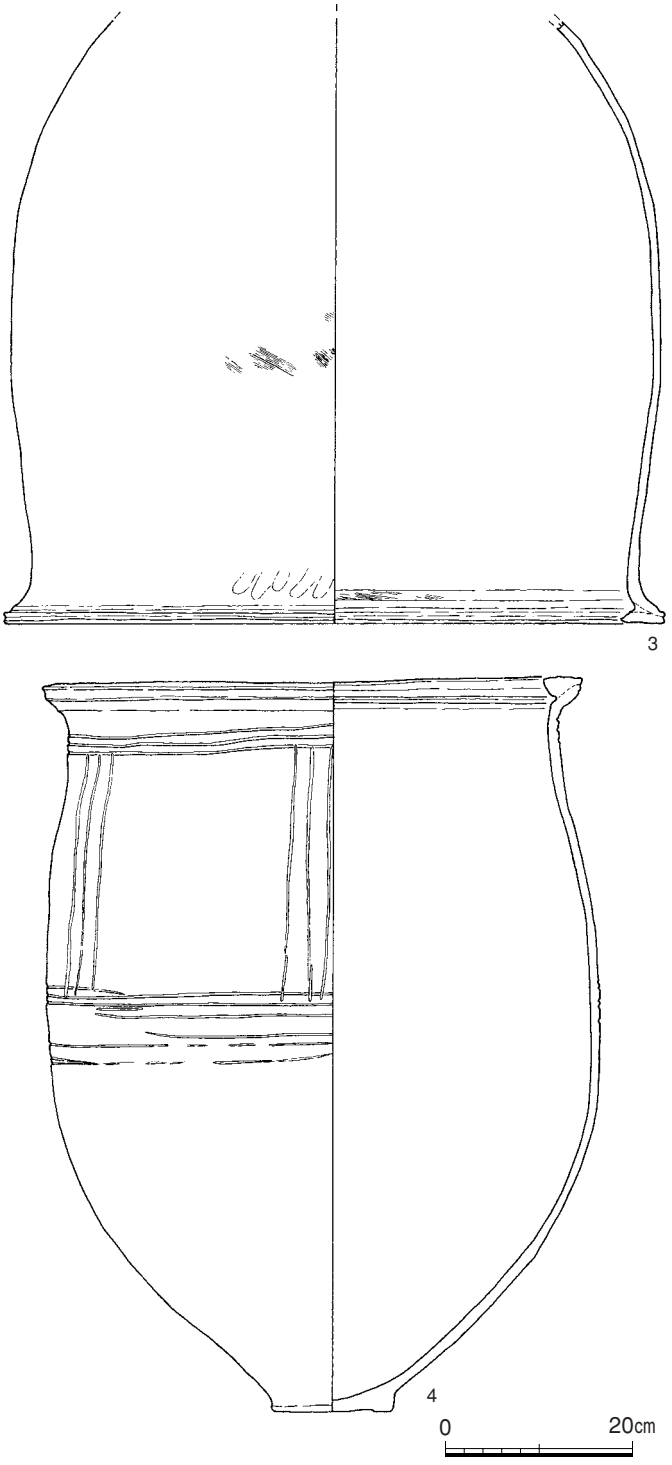


Fig.11　ＳＴ３１甕棺実測図　(1/8)

Ph.12　ＳＴ３１甕棺　(約1/10)

め左上向きのナデ調整をおこなう。口径67.0㎝、底径12.4㎝、器高80.8㎝。

7は堀方出土の甕の底部である。前述のように上棺の孔の位置から底面を下向きにして出土した。内外面ともナデ調整を施す。淡橙色を呈し、胎土に径１～３㎜の石英・長石を主体とする砂粒を含む。底径8.5㎝、残存高16.8㎝。

ＳＴ３６（Fig.14・15、Ph.15・16・18・19）

Ｃ区南端で検出した。上棺は攪乱を受けており、底部はない。上棺は甕、下棺は壺を利用する。上棺が下棺を呑む呑口式である。下棺は口縁を打ち欠いて使用され、口縁破片は上棺を支えるのに利用されている。主軸はＮ－170°－E、埋置角は47°である。堀方は南側が調査区外にのびる。残存する堀方は長軸1.15ｍ、短軸0.85ｍの楕円形で、南側は一段掘りしている。最大の深さは70㎝。ＳＴ35の堀方に切られている。

8は上棺で甕である。口縁端部上面に厚い粘土帯を貼り付け内側へ張り出させる。端部の上下両端には刻目を入れる。頸部と胴部に３条の太く明瞭な沈線を巡らす。内外面ともナデ調整をおこなう。

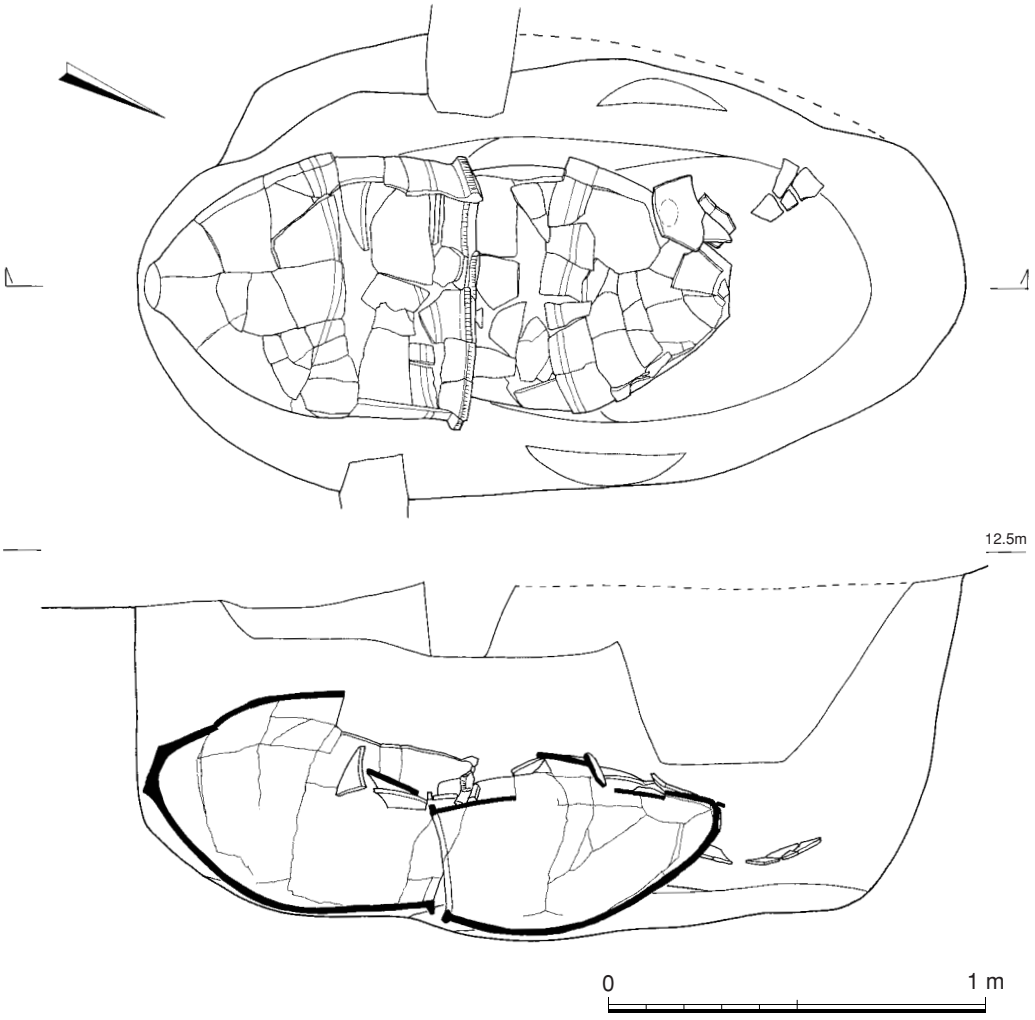
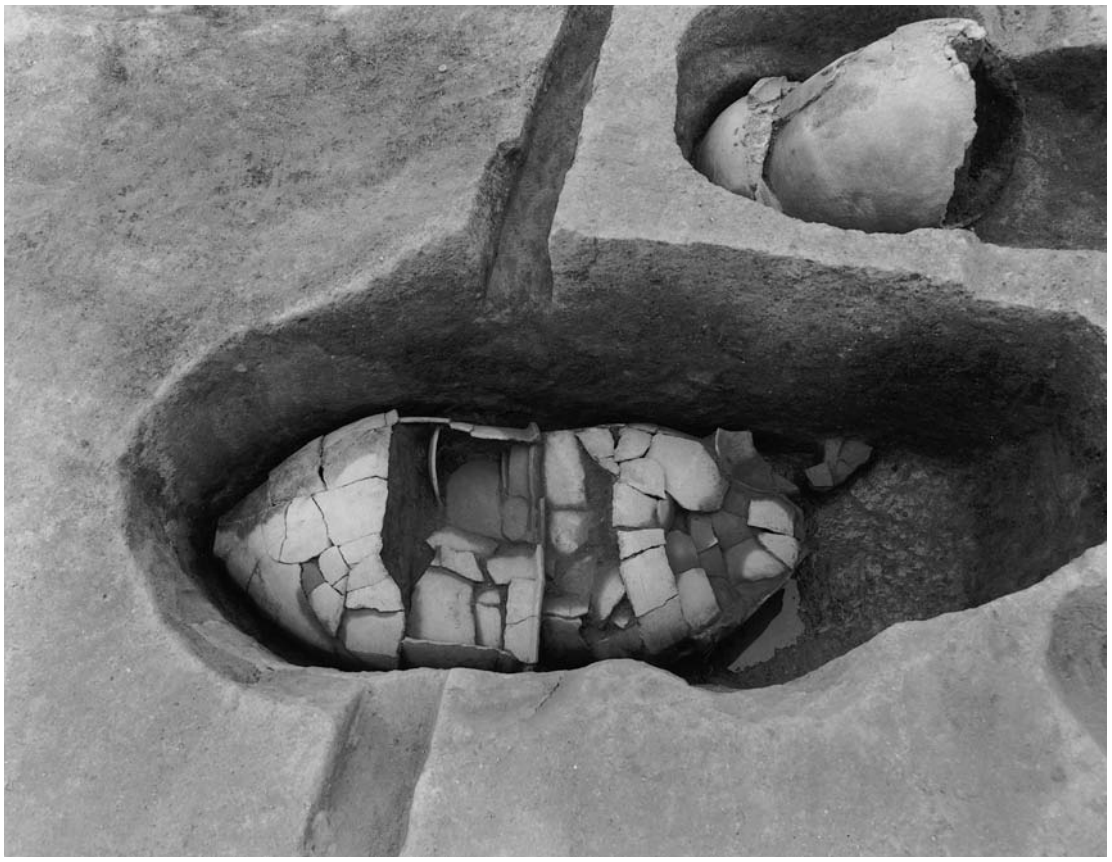


Fig.12　ＳＴ３５実測図　(1/40)



Ph.13　ＳＴ３５　（西から）

Ph.14　ＳＴ３５　（西から）

Ph.15　ＳＴ３５・３６　（南から）

Ph.16　ＳＴ３５・３６　（南から）

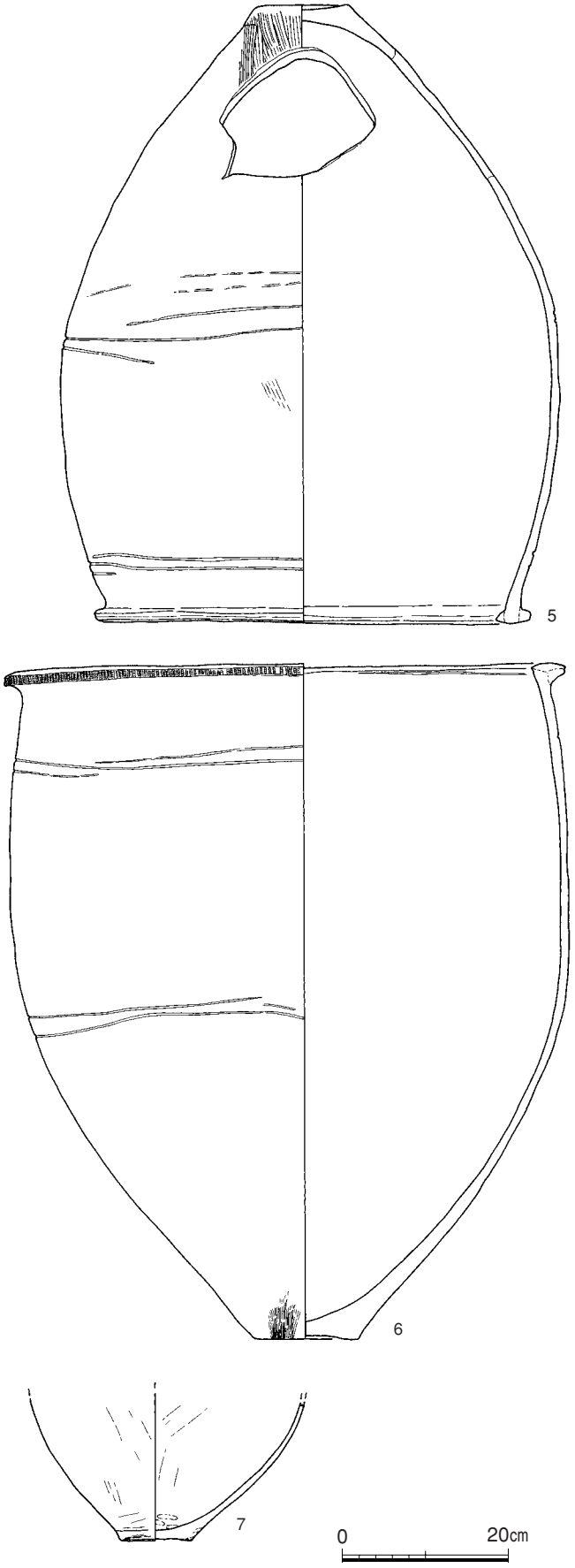


Fig.13　ＳＴ３５甕棺・出土遺物実測図　(1/8)

Ph.17　ＳＴ３５甕棺　(約1/10)

内面には押さえの痕跡が残る。褐色から赤褐色を呈し、胎土に径３㎜前後の石英・長石主体の砂粒を多く含む。口径57.6㎝、残存高61.5㎝。

9 は下棺で壺である。頸部下で口縁が打ち欠かれ、破片はほとんどが上甕の支えとして利用されていた。接合して１周するが、胴部との接点がない。破断面はほぼ水平であり、粘土の接合面できれいに割れたものと思われる。口縁端部上面に厚い粘土帯を貼り付け肥厚させ、端部の上下両端には刻目を入れる。頸部に沈線を１条、その下に小さな突帯を巡らす。内外面ともナデ調整を施す。淡褐色～暗褐色を呈し、胎土に径１～３㎜の石英・長石・雲母を主体とする砂粒を多く含む。口径33.4㎝、胴部径60.0㎝、底径11.0㎝、復元器高60.3㎝。

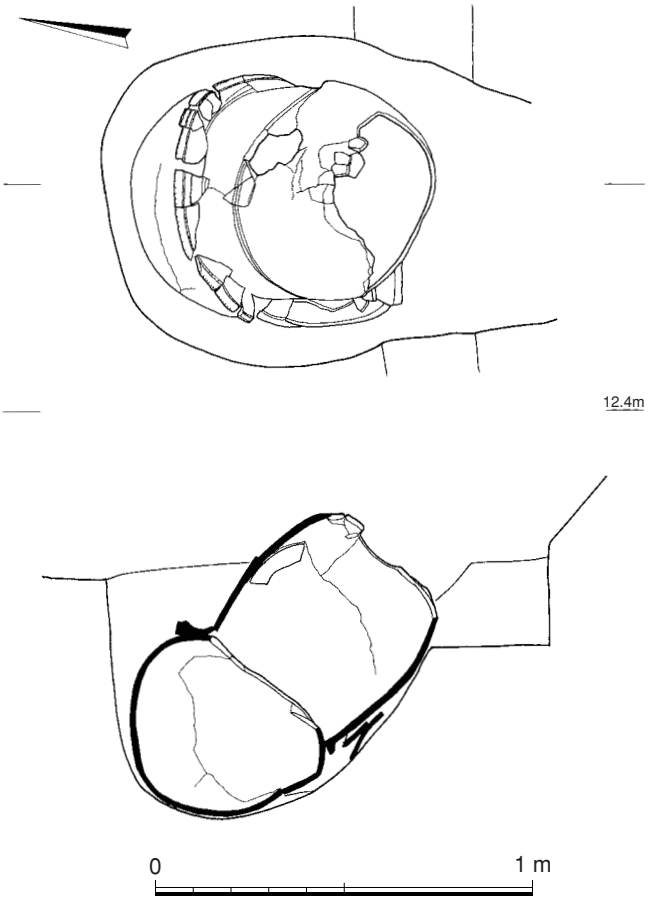


Fig.14　ＳＴ３６実測図　(1/20)

Ph.18　ＳＴ３６　(西から)

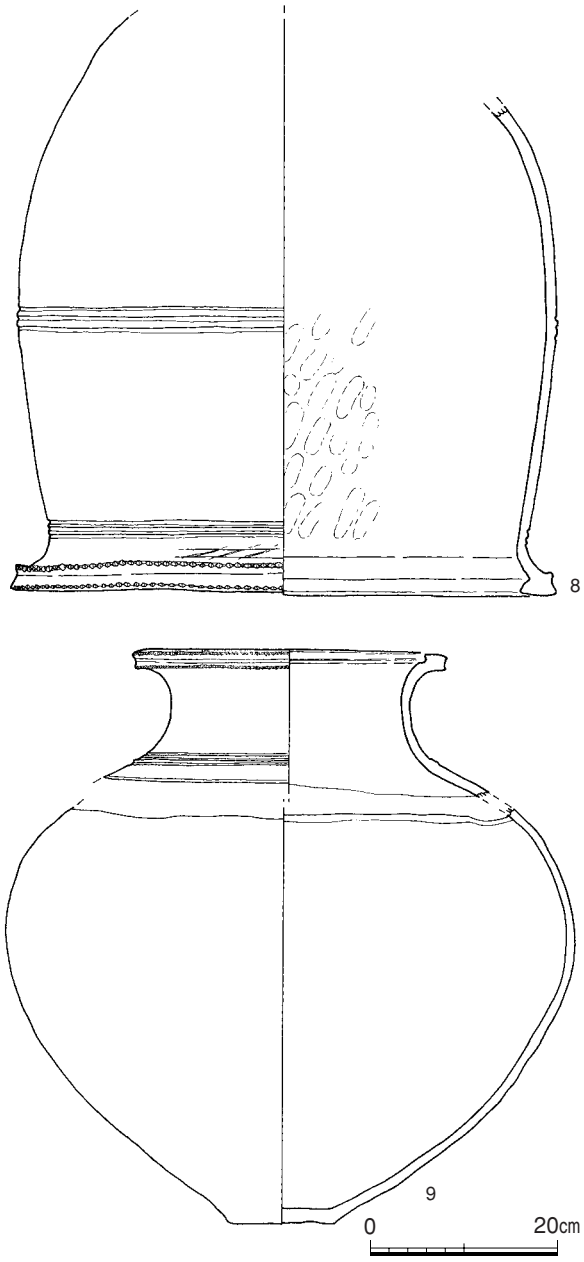


Fig.15　ＳＴ３６甕棺実測図　（1/8）

Ph.19　ＳＴ３６甕棺　（約1/10）

（２）土壙墓・木棺墓

土壙墓・木棺墓と考えられる土坑が５基確認された。すべてＣ区南部に分布し、ＳＫ29と30、ＳＫ32～34がそれぞれ接するように位置する。主軸は甕棺と同じくほぼ南北方向であるが、ＳＫ34を除く４基はほぼ同一である。ＳＫ38は甕棺の堀方と考えられるのでここで報告する。

ＳＫ２９　(Fig.15、Ph.20)

Ｃ区南部に位置する。ＳＫ30を切る。長軸2.2m、短軸1.0mの長方形で、深さは30㎝程度である。主軸をN−21°−Wにとる。

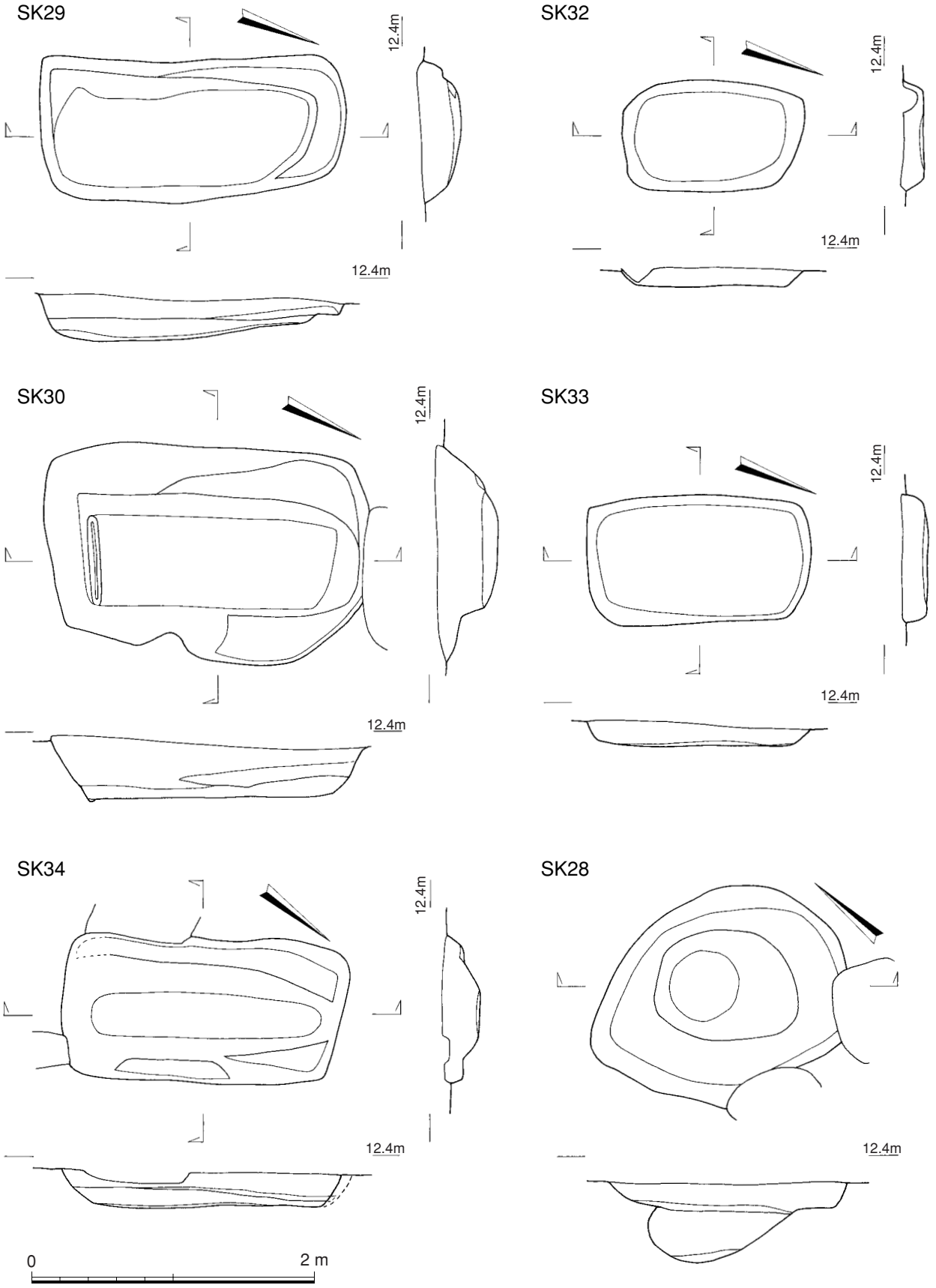


Fig.16　土壙墓・木棺墓実測図　(1/40)

Ph.20　ＳＫ２９・３０　（北から）

Ph.21　ＳＫ３２・３３・３４　（北西から）

Ph.22
ＳＫ３０　（東から）

Ph.23
ＳＫ３４　（西から）

Ph.24
ＳＫ２８　（西から）

ＳＫ３０（Fig.15、Ph.20・22）
Ｃ区南部に位置する。ＳＫ29に切られる。長軸2.2ｍ、短軸1.5ｍの長方形で、深さは40㎝程度である。主軸をN−21°−Wにとる。南側の小口が若干掘り窪められており、木棺墓であると考えられる。

ＳＫ３２（Fig.15、Ph.21）
Ｃ区南部に位置する。長軸1.3ｍ、短軸0.8ｍの長方形で、深さは10㎝程度である。他に比べ、小型である。小児用か。主軸をN−20°−Wにとる。

ＳＫ３３（Fig.15、Ph.21）
Ｃ区南部に位置する。長軸1.6ｍ、短軸0.9ｍの長方形で、深さは20㎝程度でやや小ぶりである。主軸をN−20°−Wにとる。

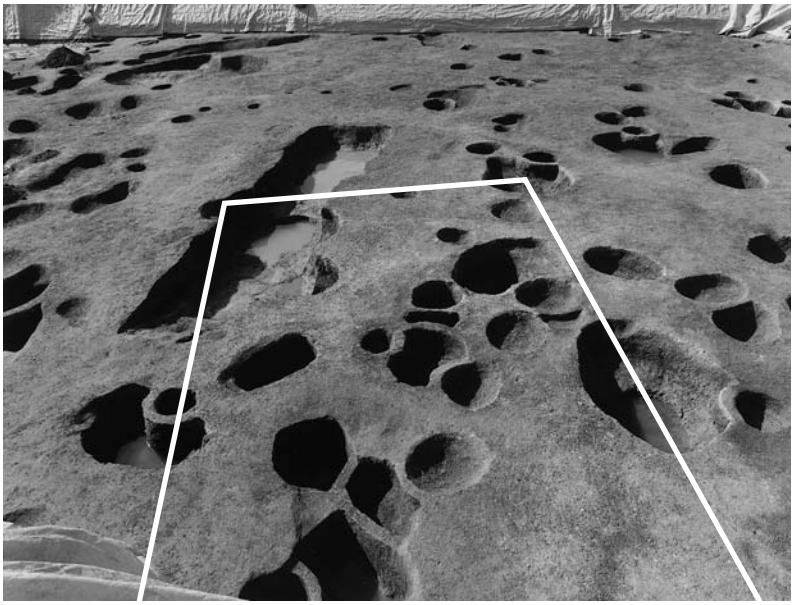
ＳＫ３４（Fig.15、Ph.21・23）
Ｃ区南部に位置する。長軸2.0ｍ、短軸1.0ｍの長方形で、深さは30㎝程度である。長辺両側に段をつける。主軸をN−39°−Wにとり、他の４基と主軸をやや異にする。

ＳＫ３８（Fig.15、Ph.24）
Ｃ区南部に位置する。長軸1.9ｍ、短軸1.4ｍ、深さは60㎝程度の楕円形を呈する。主軸をN−139°−Eにとる。２段掘りしており、下段の掘り込みは斜め方向である。甕棺が抜き取られた墓壙であろうか。

（３）掘立柱建物
ＳＢ１０（Fig.17、Ph.25）
Ａ区・Ｂ区で調査をおこなった。梁行１間、桁行２間の掘立柱建物で主軸はN−30°−Wである。柱間は3.2ｍ、堀方は70～130㎝、深さ60～90㎝。方形の２段掘りのものが基本のようである。
弥生時代中期の土器が多いが、柱穴の出土遺物より弥生時代後期後半以降の建物と考えられる。

ＳＢ１１（Fig.18・23、Ph.26）
Ａ区の東端に位置する。梁行１間、桁行２間以上の掘立柱建物で調査区東側にのびる。主軸はN−64°−Wである。ＳＢ12とほぼ同位置にあり、ＳＢ12の柱穴を３ヶ所で切っている。柱間は梁行2.7ｍ、桁行2.4ｍで、堀方は径60～100㎝の円形で、深さ60～90㎝。
柱穴出土の遺物をFig.23に示す。**10**はＳＰ114出土の丹塗りの無頸壺である。外面横方向のミガキ、内面ヨコナデを施す。胎土に径１～３㎜の砂粒を含む。口径14.0㎝。**11**はＳＰ117出土の伝統的Ｖ様式系の甕の底部である。**12**も伝統的Ｖ様式系の甕の底部である。ＳＰ114・115の上層より出土であり建物に属さない可能性がある。**13**はＳＰ114出土の壺の胴下部の破片である。突帯が巡る。
柱穴の出土遺物より弥生時代終末～古墳時代初頭の建物と考えられる。

ＳＢ１２（Fig.19・23、Ph.26）
Ａ区の東端に位置する。ＳＢ11に切られる。梁行１間、桁行３間以上の掘立柱建物で調査区東側に



Ph.25　ＳＢ１０　（南東から）

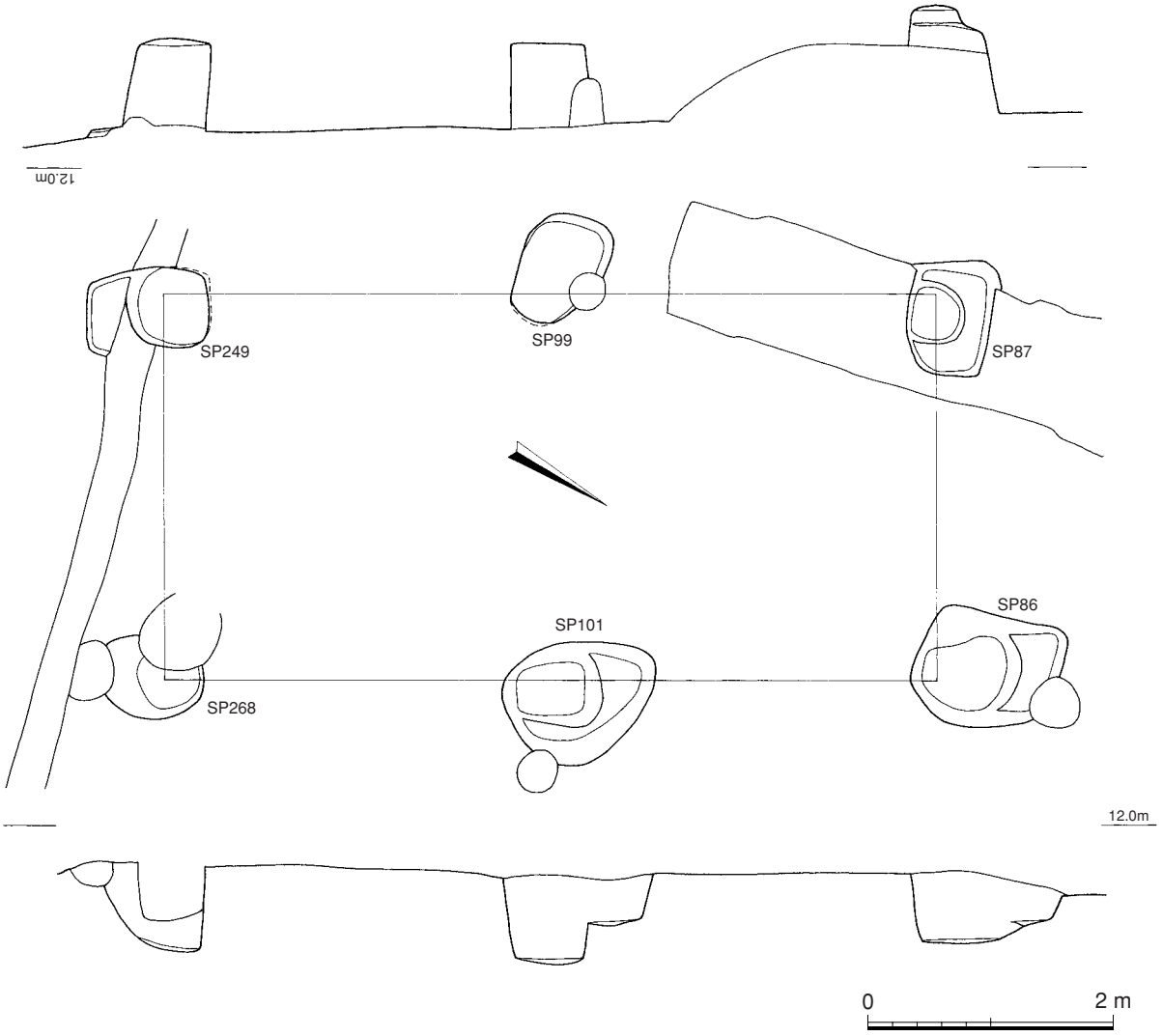


Fig.17　ＳＢ１０実測図　（1/60）

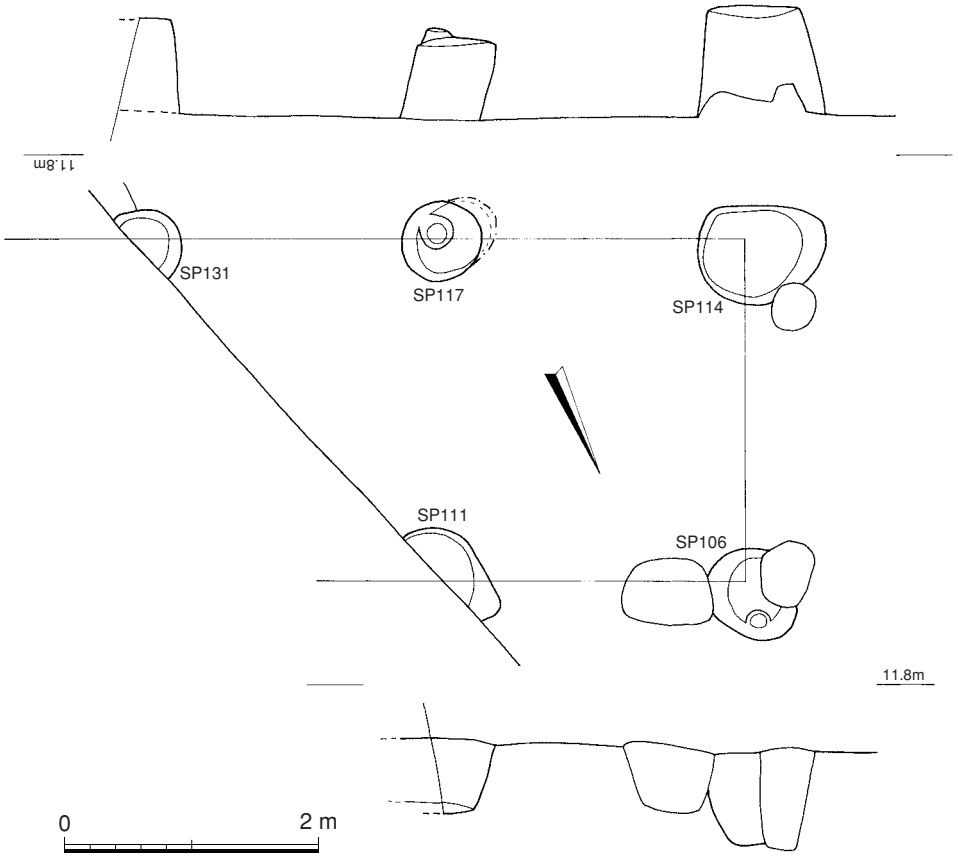


Fig.18　ＳＢ１１実測図　(1/60)

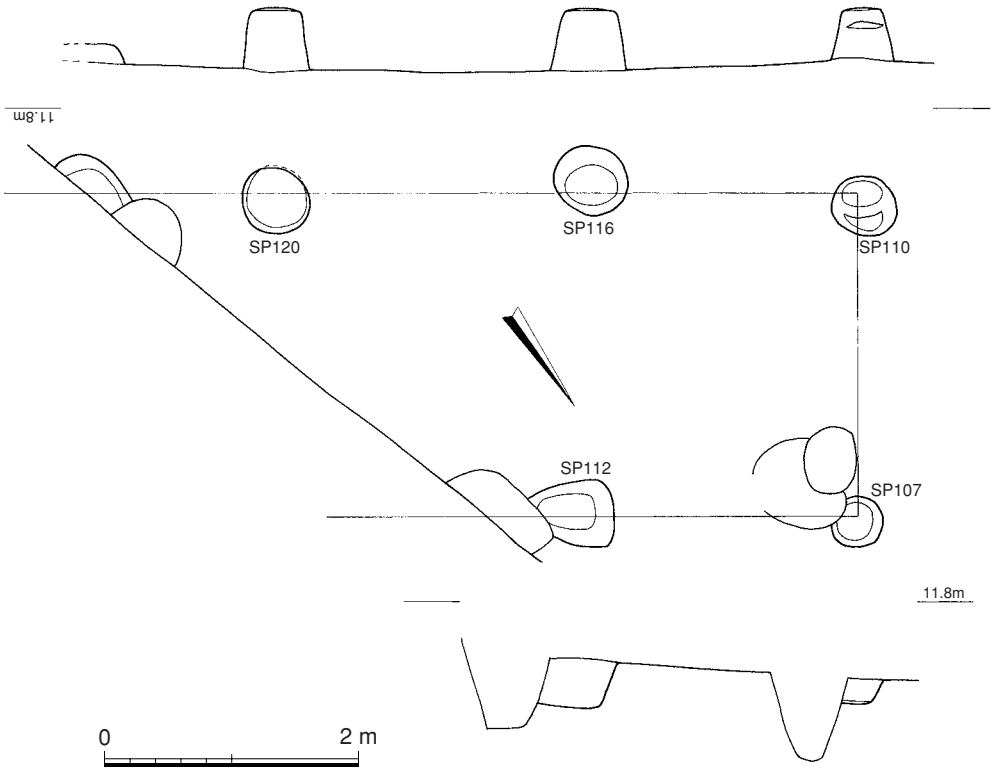
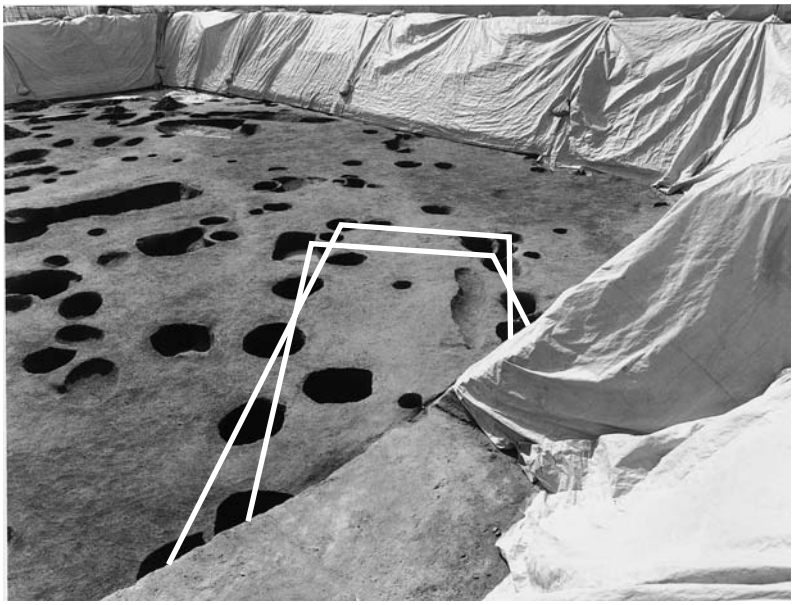


Fig.19　ＳＢ１２実測図　(1/60)



Ph.26　ＳＢ１１・１２　（南東から）

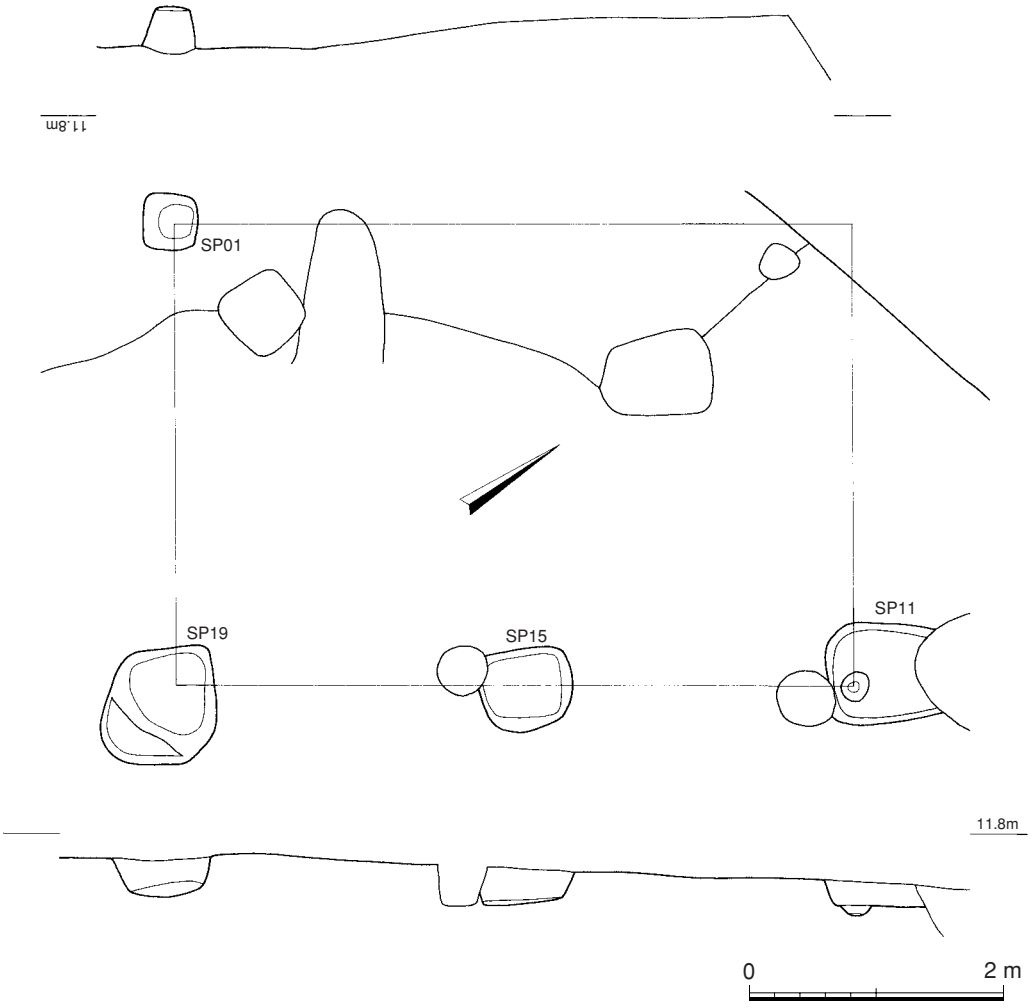
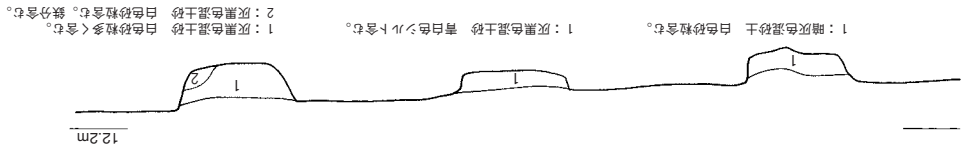


Fig.20　ＳＢ１３実測図　（1/60）



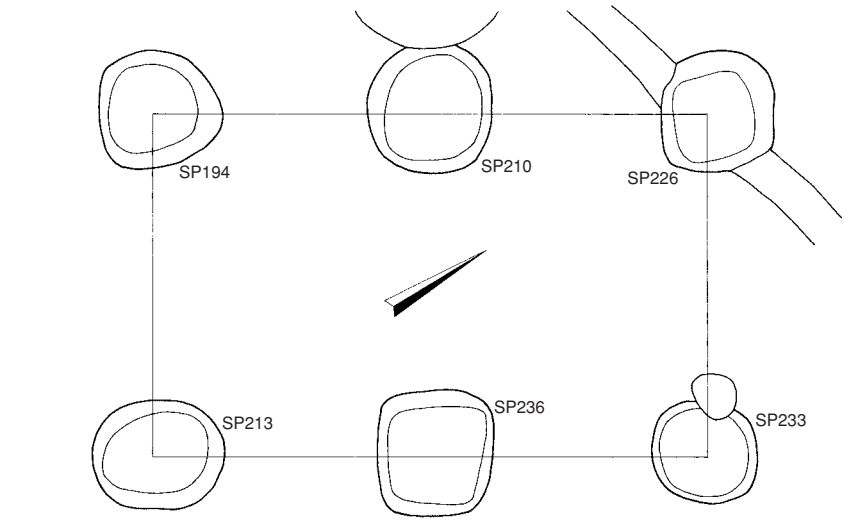


Fig.21　ＳＢ２３実測図　(1/60)

Ph.27　ＳＢ２３　(北東から)

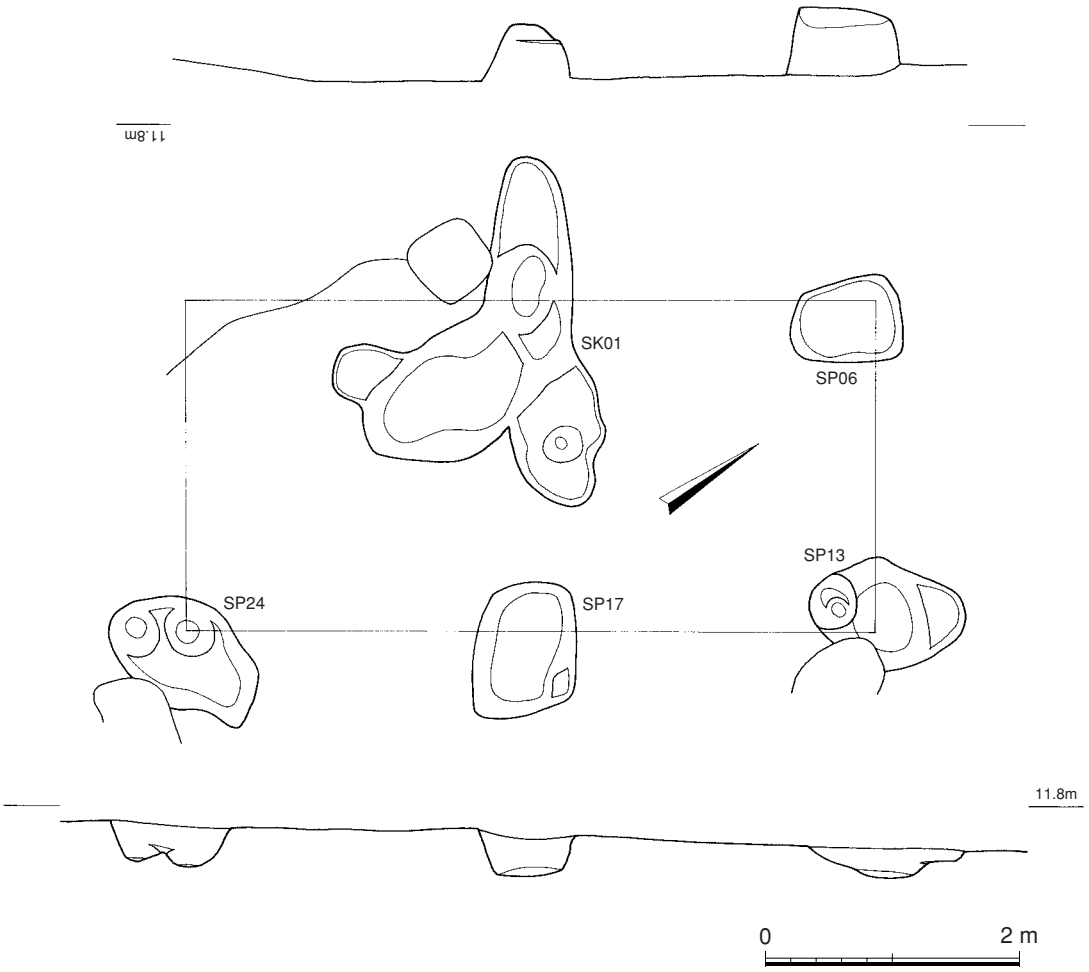


Fig.22　ＳＢ４１実測図　(1/60)

Ph.28　ＳＢ１３・４１　(南から)

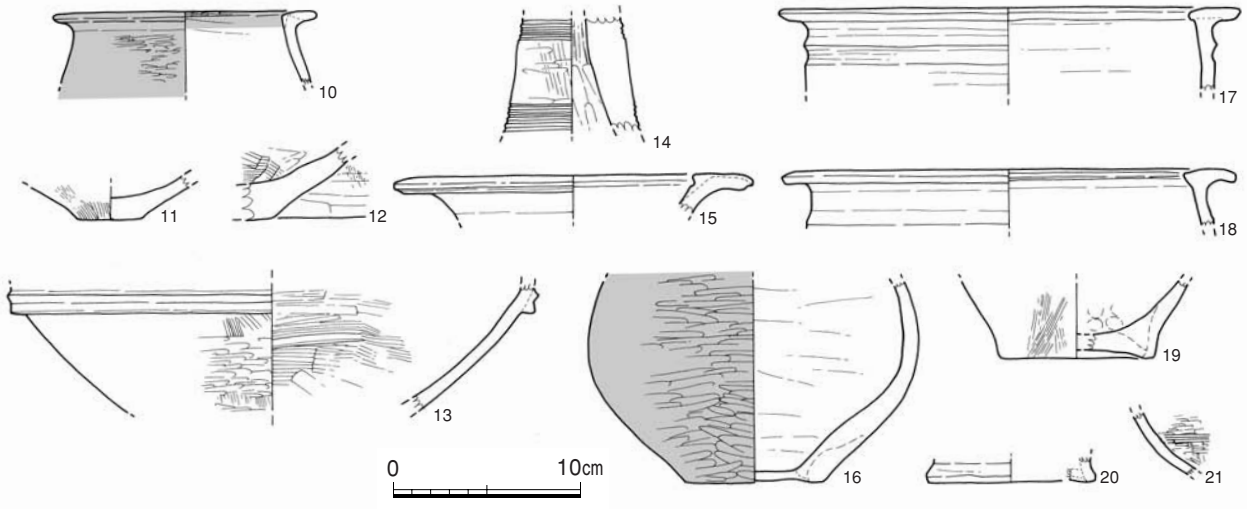


Fig.23　掘立柱建物柱穴出土遺物実測図　（1/4）

のびる。主軸はN−56°−Wである。柱間は梁行2.5mで桁行は1.5～2.5mとばらつく。東側１間はのばし過ぎか。堀方は径40～70cmのやや小降りの円形で、深さ20～50cm。東側の柱穴は浅く、やはり東側１間はのばし過ぎか。

柱穴出土の遺物をFig.23に示す。**14**はＳＰ116出土の瀬戸内系の高坏脚部である。櫛描きが２ヶ所みられる。

柱穴の出土遺物より弥生時代後期前半の建物と考えられる。

ＳＢ１３　(Fig.20・23、Ph.28)

Ａ区の北西部に位置する。ＳＢ43と同位置にある。梁行１間、桁行２間の掘立柱建物でさらに北側にのびる可能性もある西側は全体的に下げすぎており、柱穴をとばしてしまったものと思われる。主軸はN−34°−Eである。柱間は梁行3.65m、桁行2.7m、堀方は50～100cm、深さ20～30cm。方形を意識した柱穴である。

柱穴出土の遺物をFig.23に示す。**15**はＳＰ19出土の壺の口縁部である。

柱穴の出土遺物より弥生時代後期後半の建物と考えられる。

ＳＢ２３　(Fig.21・23、Ph.27)

Ｂ区の中央部に位置する。梁行１間、桁行２間の掘立柱建物で主軸はN−32°−Eである。柱間は梁行2.7m、桁行2.4m、堀方は80～110cm、深さ10～40cm。方形と円形の２種類ある。

柱穴出土の遺物をFig.23に示す。**16**は弥生時代中期後半の丹塗りの壺である。ＳＰ226出土。

図示した以外の柱穴の出土遺物より古墳時代前期の建物と考えられる。

ＳＢ４１　(Fig.22・23、Ph.28)

Ａ区の北西部に位置する。ＳＢ13と同位置にある。梁行１間、桁行２間の掘立柱建物である。南西の柱穴は遺構確認面の下げすぎで確認されなかった。主軸はN−34°−Eである。柱間は梁行2.6m、桁行2.25m。柱穴のプランは不定形で80～130cm、深さ25～55cm。

柱穴出土の遺物をFig.23に示す。**17**・**18**は逆Ｌ字状の口縁の甕である。ＳＰ13出土。**19**はＳＰ24出土の甕の底部である。**20**・**21**は弥生時代前期の土器。混入品である。**20**がＳＰ17、**21**がＳＰ24出土。
柱穴の出土遺物より弥生時代中期後半の建物と考えられる。

（４）土坑

ＳＫ０１（Fig.24）
Ａ区北西部に位置する不整形土坑である。東西2.8m、南北1.8m、深さ10～30㎝。一部はＳＢ41の柱穴とした。

ＳＫ０２（Fig.24・27）
Ａ区南西部に位置する不整形土坑である。東西2.0m、南北1.0m、深さは北側が30㎝、南側が15㎝。
Fig.27に出土遺物を示す。**22**は弥生時代中期末の小型無頸壺である。丹塗りされる。胴部上半に縦方向の暗文がある。

ＳＫ０３（Fig.24）
Ａ区中央北部に位置する楕円形土坑である。ＳＫ04、ＳＢ13の柱穴ＳＰ11を切る。長軸3.4m、短軸1.1m、床面は凹凸があり深さは20～50㎝。

ＳＫ０４（Fig.24）
Ａ区中央北部に位置する不整形土坑である。ＳＫ04、ＳＢ13の柱穴ＳＰ11に切られる。東西2.7m、南北2.4m、深さは30㎝。

ＳＫ０５（Fig.24・27、Ph.29・32）
Ａ区とＢ区境の中央部に位置する。ＳＫ22に切られ、ＳＫ06を切る。径3.8m程の略円形土坑であろうか。深さ20㎝。西側で遺物が集中して出土した。
Fig.27に出土遺物を示す。**23**は丹塗りの小型無頸壺である。**24**は丹塗りの広口壺の口縁部。口縁端部に沈線と押圧列点文を施す。口縁下には縦方向の暗文を施す。**25**は壺である。**26**は無頸壺である。**27**は直口壺である。丹塗りされる。**28**はミニチュアの無頸壺である。**29**は小型壺の底部か。以上の遺物から弥生時代後期前半の遺構と考えられる。

ＳＫ０６（Fig.24）
Ａ区とＢ区の境の中央部に位置する。ＳＫ05に切られる。長軸3.0m、短軸1.9mの長方形土坑である。南東側は二段掘りになっている。深さは20㎝。

ＳＫ０７（Fig.24）
Ａ区の北壁際に位置する不整形土坑である。長軸2.0m、短軸1.0m。深さは10～20㎝。

ＳＫ０８（Fig.25）
Ａ区の東壁際に位置する溝状の土坑である。長さ2.0m、幅0.4m、深さ10㎝。

ＳＫ０９（Fig.25・27）
Ａ区北西部に位置する不整形土坑である。東西1.6m、南北0.6m、深さは10㎝。北壁がせり出しており、東側はピットの重複か。
Fig.27に出土遺物を示す。**30**は高坏の脚部である。

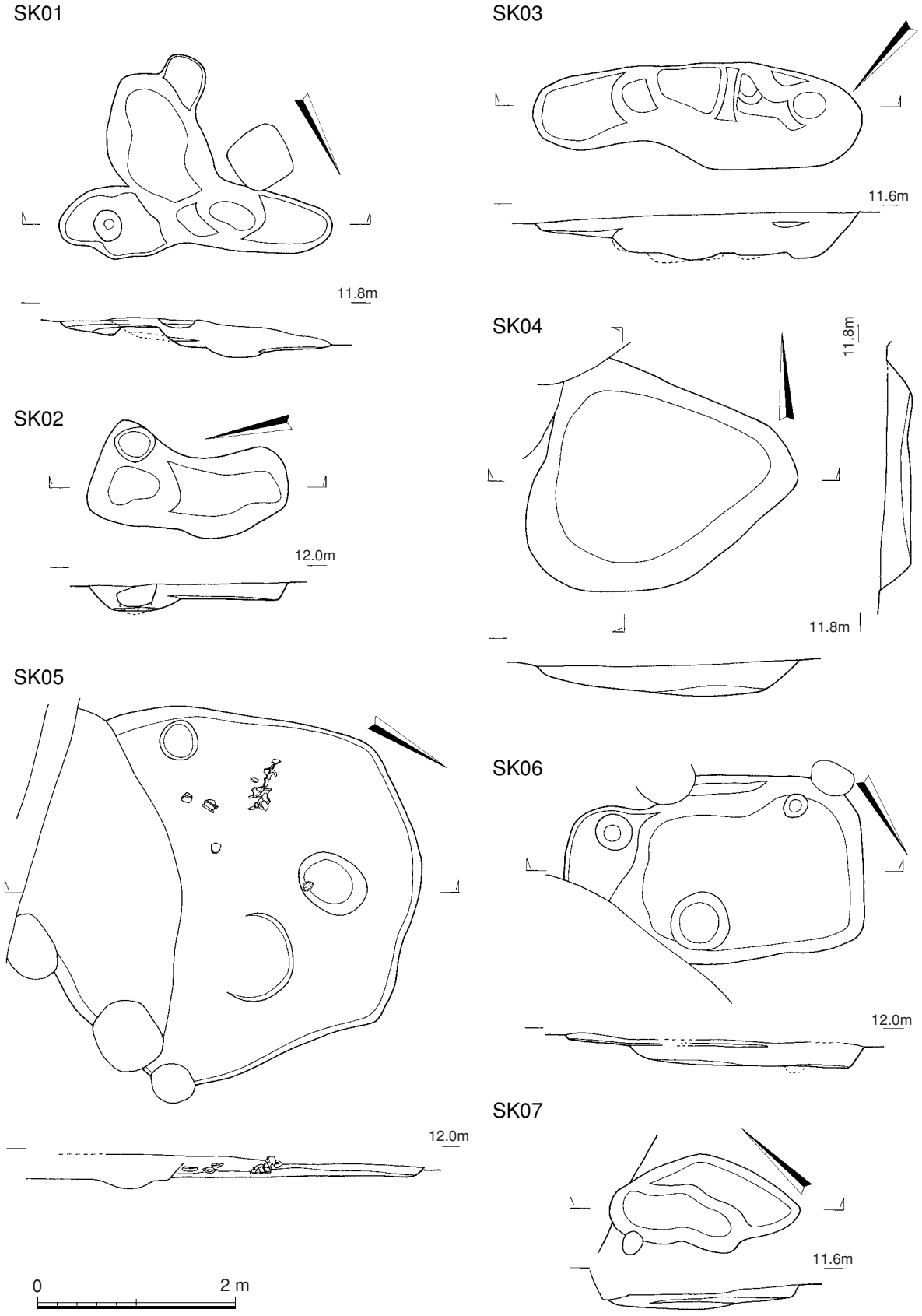


Fig.24　土坑実測図　1　(1/60)

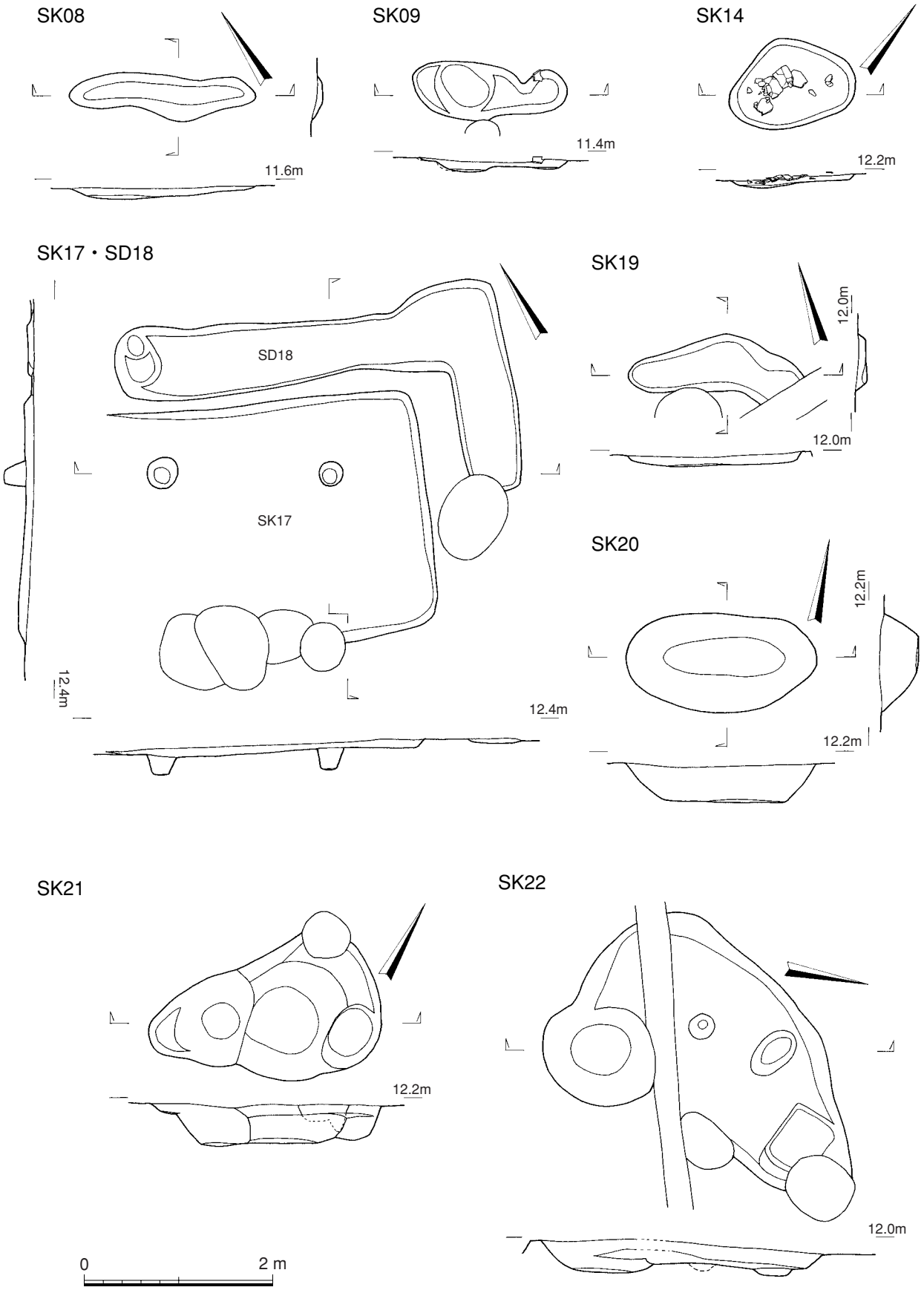


Fig.25　土坑実測図　2　(1/60)

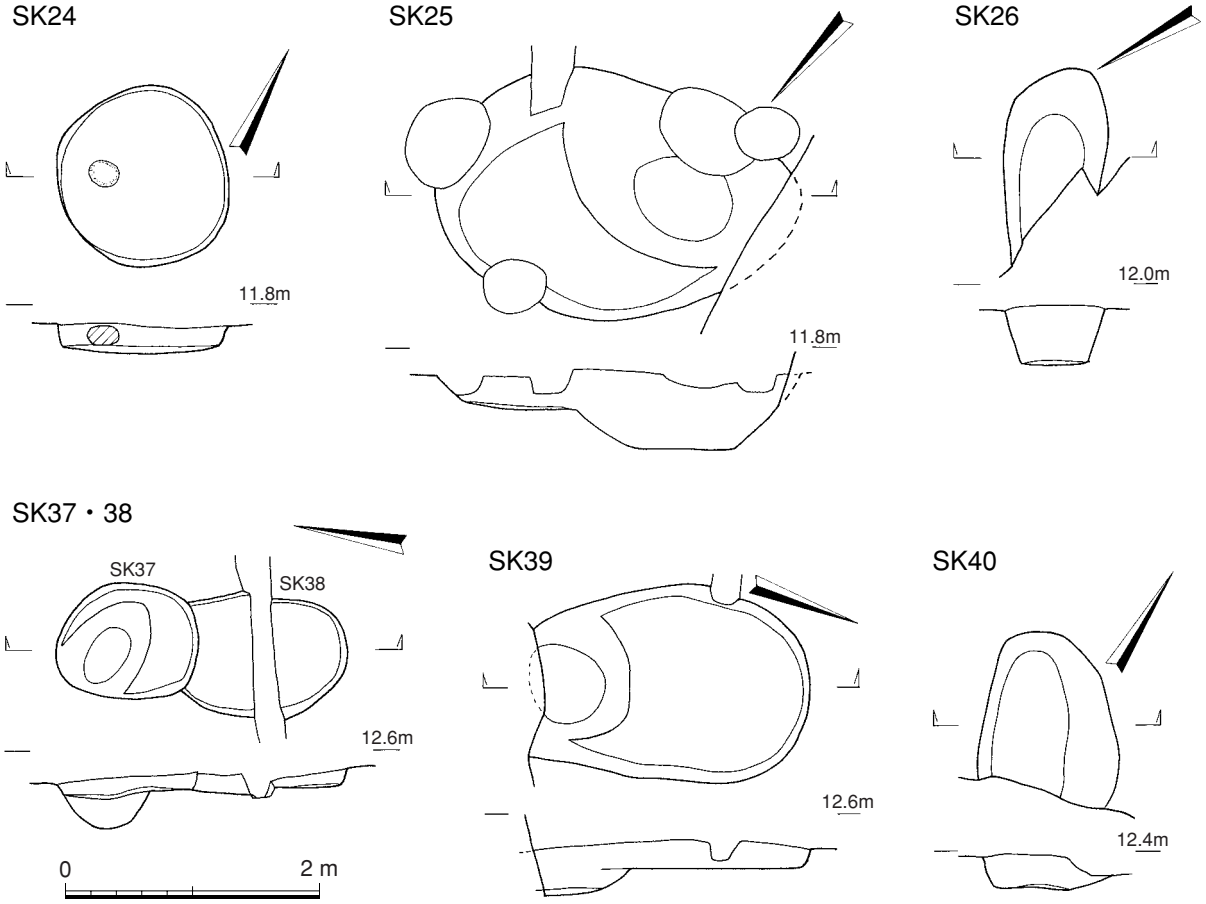


Fig.26　土坑実測図　3　(1/60)

ＳＫ１４（Fig.25・27、Ph.30）

Ｂ区南西部に位置する不整形の土坑である。ＳＫ17を切る。長軸1.4m、短軸1.0m、深さ10㎝。大型の甕の破片が敷き並べたようなかたちで出土した。甕棺の可能性もある。

Fig.27に出土遺物を示す。**31**は高坏の坏部である。**32**は大型の甕の胴部である。残存部には３ヶ所の突帯が見られる。一番上は剥離して痕跡のみをとどめる。二段目は斜め方向にハケ工具で刺突をおこなう。一番下はハケ工具で×印の刺突をおこなう。

ＳＫ１７・ＳＤ１８（Fig.25）

Ａ区南西部に位置する。ＳＫ17は西側が削平され確認できなかったが、方形の土坑で、長軸の残存長3.3m、短軸2.6m、深さ10㎝。北壁寄りに浅いピットが２ヶ所ある。ＳＤ18はこの土坑の北側と東側を囲うようにＬ字に屈曲する。幅0.6～0.8m、深さ10㎝。ＳＫ17と合わせて２本柱の方形竪穴住居のような形態をしている。

ＳＫ１９（Fig.25）

Ｂ区北西部に位置する溝状の土坑である。片側は撹乱により失われる。残存長２m、幅50㎝、深さ10㎝である。

Ph.29　ＳＫ０５
遺物出土状況　（南から）

Ph.30　ＳＫ１４
遺物出土状況　（南東から）

Ph.31　ＳＫ１７・
ＳＤ１８　（南西から）

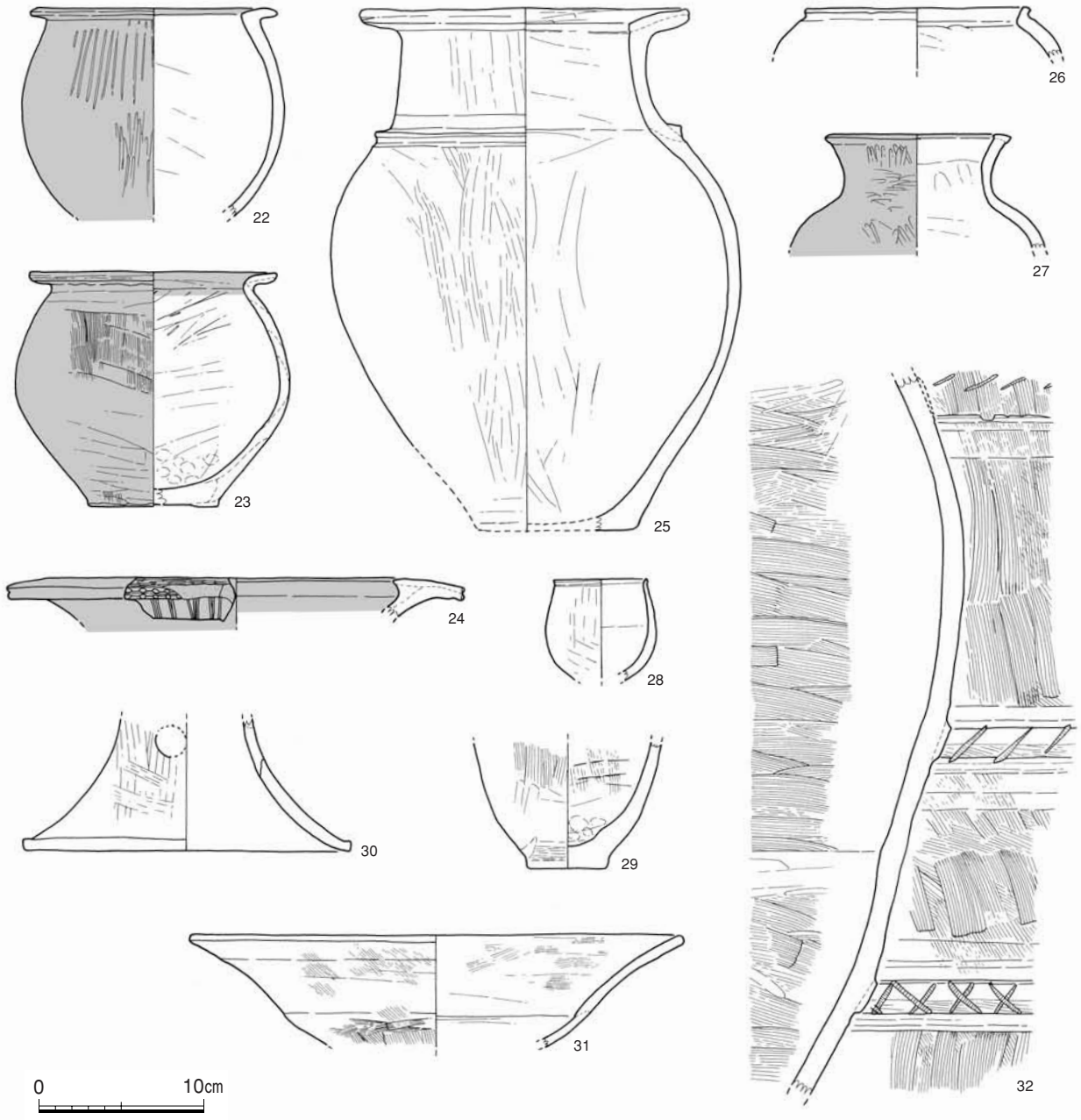


Fig.27　土坑出土遺物実測図　(1/4)

ＳＫ２０（Fig.25）

Ｂ区中央やや西寄りに位置する楕円形の土坑である。長軸2.0ｍ、短軸1.0ｍ、深さ40㎝。地山と覆土の境界が曖昧で、人工的な掘り込みではないのかもしれない。

ＳＫ２１（Fig.25）

Ｂ区南部に位置する不整形土坑である。ＳＸ16の下部で検出されている。長軸2.5ｍ、短軸1.6ｍ、深さ40㎝。いくつかのピットの切り合いであろうか。

ＳＫ２２（Fig.25）
Ｂ区中央北部に位置する不整形土坑である。長軸3.7ｍ、短軸0.9ｍ、深さ30㎝。

ＳＫ２４（Fig.26）
Ｂ区中央南寄りに位置する径1.4ｍの円形土坑である。Ｂ区調査終了後、重機でだめ押し調査をおこなったところ発見された。残存の深さは25㎝。人頭大の礫が出土した。

ＳＫ２５（Fig.26）
Ｃ区北部に位置する。長軸2.9ｍ、短軸2.0ｍの楕円形土坑である。北側にはテラスがある。深さは60㎝。

ＳＫ２６（Fig.26）
Ｃ区中央に位置する。西側は調査区外にのびる。長軸1.5m以上、短軸0.9m、深さ50㎝。

ＳＫ３７（Fig.26）
Ｃ区南部に位置する楕円形土坑である。ＳＫ38を切る。長軸1.1ｍ、短軸0.9ｍ、深さ40㎝。

ＳＫ３８（Fig.26）
Ｃ区南部に位置する楕円形土坑である。ＳＫ37に切られる。長軸1.3ｍ、短軸1.0ｍ、深さ15㎝。

Ph.32　土坑出土遺物　（約1/4）

ＳＫ３９（Fig.26）
Ｃ区南部に位置する楕円形土坑である。南側がピット状に深くなっている。南側は調査区外にのびる。長軸2.2m以上、短軸1.6ｍ、深さ40㎝。

ＳＫ４０（Fig.26）
Ｃ区南部に位置する。南側は調査区外にのびる。長軸1.4m以上、短軸1.0ｍ、深さ25㎝。

（５）遺物集中部

ＳＸ１６（Fig.28～30、Ph.33・34）
Ｂ区の南西部で検出した遺物集中部である。６×３ｍの範囲、特に径３ｍに集中して甕の破片などが散乱した状況で出土している。レベルに高低差は見られないようであるが、南に向かって若干下がっているようである。

出土遺物は甕を中心とする弥生時代終末期の一括土器群で（**33**～**42**）、いずれも在地系である。**33**は器高47.4㎝を測るやや大型の甕である。頸部直下に扁平な突帯を有する。レンズ状底である。**34**は

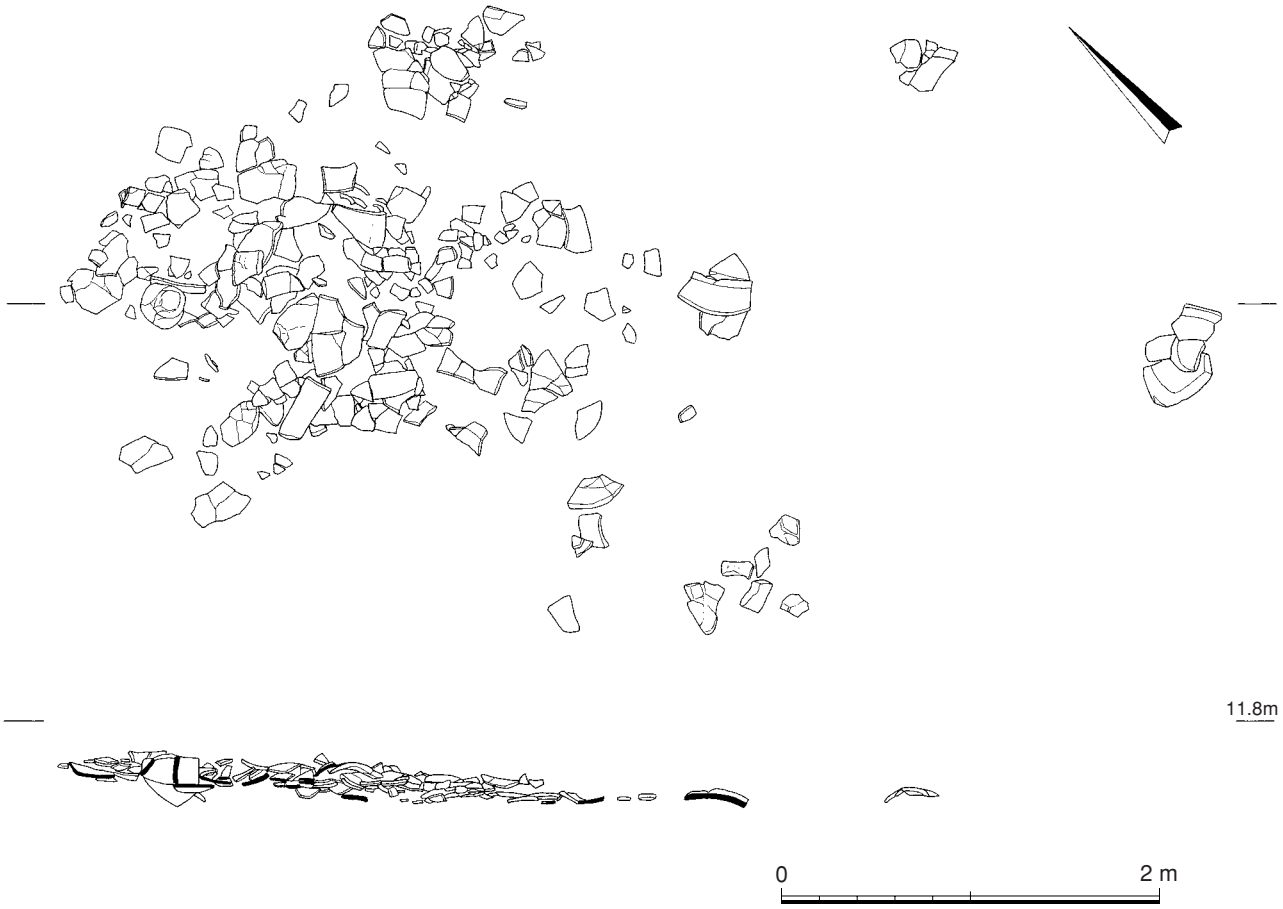


Fig.28　ＳＸ１６実測図　(1/40)

Ph.33　ＳＸ１６　(南西から)

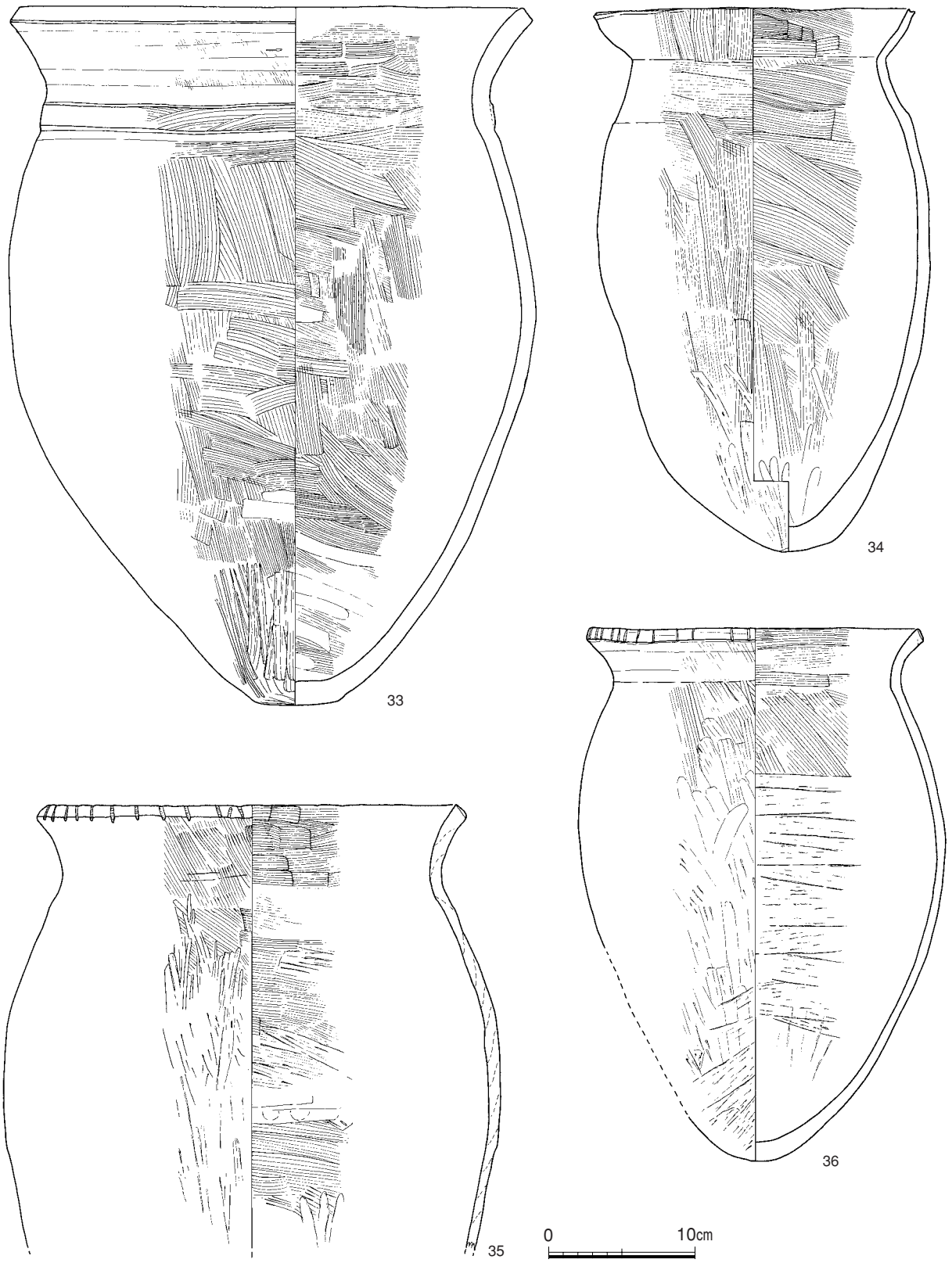


Fig.29　ＳＸ１６出土遺物実測図　１　(1/4)

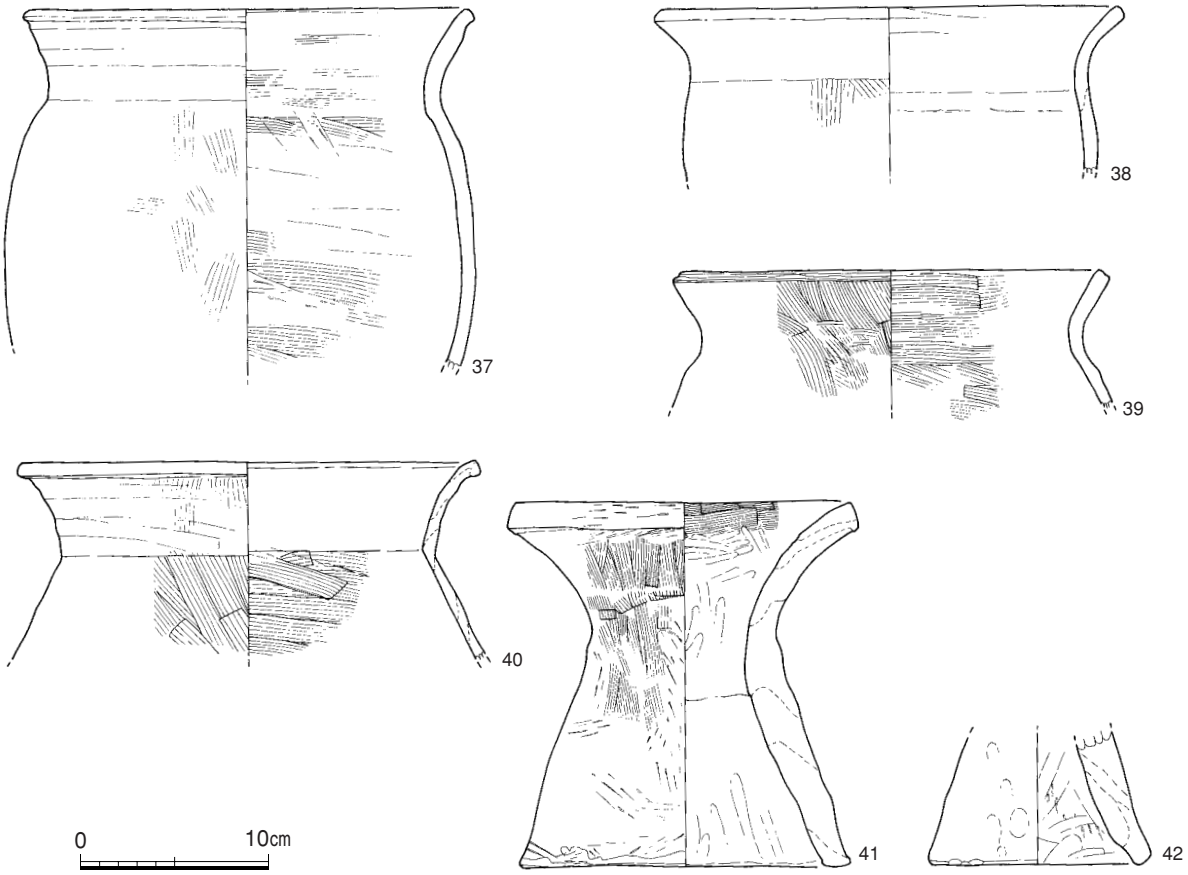


Fig.30　ＳＸ１６出土遺物実測図　２　(1/4)

Ph.34　ＳＸ１６出土遺物　(約1/6)

中型の甕の中でもより粗製のものである。レンズ状底であるが、底部付近と口縁付近の軸のずれが大きい。器壁も相対的に厚い。口頸部のナデ調整が省略され、口縁端面は未調整となっている。口頸部の形状が内湾気味であるのも、器面調整の不徹底によるためであろう。**35**は口径28㎝を測るやや大型の甕で、口縁端面にはハケメと同一工具による列点文を有する。外面のカキナデ・ケズリは頸部近くにまで及ぶ。**36**は口縁端面に列点文を有する中型の甕で、底部は尖り気味の丸底である。外面のカキナデ・ケズリは胴部上位に及び、これに対応する部位の内面調整が弱いケズリとなっている。**37**～**40**は中型甕の口縁～胴上部である。**41**は器台である。口径が脚径をやや上回り、脚部は内湾気味である。裾部には1次調整のタタキ(左上がり)の痕跡がみられる。**42**は支脚の脚部である。

（６）ピット出土遺物（Fig.31、Ph.35）

建物としてまとめることができなかったその他のピットからは以下のような土器が出土している。

ＳＰ12：弥生終末期前後の細頸直口壺または小型二重口縁壺の頸部(**61**)。精製品である。ＳＰ16：弥生中期後葉の袋状口縁壺(**57**)。ＳＰ21：古墳前期の在地系鉢(**69**)、ＳＰ26：弥生終末～古墳前期初頭の小型甕(**51**)、甕底部(**49**)、鉢(**68**)。**51**は口縁部が短く丸底である。外面にタタキ痕跡を残し、内面はケズリ調整である。**49**はレンズ状底である。**68**は口縁部がいびつであるがやや内湾する。外面にススが付着し、二次的な被熱により赤変している。ＳＰ30：弥生中期後葉の鋤先形口縁甕(**45**)、袋状口縁壺(**56**)。ＳＰ38：弥生中期後葉の鋤先形口縁甕(**46**)。強い回転ヨコナデによって作出された擬突帯を頸部下に有する。ＳＰ39：弥生中期後葉の壺頸部(**58**)。M字形突帯の上下に暗文を有し、赤彩が施される。ＳＰ52：鉢形手捏ね土器(**73**)。ＳＰ57：後期中葉前後の甕(**47**)、鉢(**71**)。鉢は10％未満の小片のため、径と傾きの復元は確実性に欠ける。ＳＰ59：弥生終末期前後と考えられる甕(**54**)、無頸壺(**60**)。ＳＰ64：弥生後期の鉢(**67**)。内面の口縁部近くに竹管文状のものが施されている。ＳＰ71：弥生中期後葉の鋤先形口縁甕(**44**)。強い回転ヨコナデによって作出された擬突帯を頸部下に有する。ＳＰ92：弥生後期後半と考えられる小型の粗製甕(**50**)、丸みのある平底(**52**)、鉢形の手捏ね土器(**74**)。ＳＰ136：弥生中期～後期の器台脚(**66**)。ＳＰ141：陶質土器(**77**)。胴部の格子目タタキを特徴とする小型短頸壺の小片である。頸部の回転ナデの下にもタタキの痕跡がみえる。内面は回転ナデを基本とするが、頸部内面は非回転ナデとなっている。この遺構からは他に弥生中期～古墳前期と考えられる小片が数点出土しているが図化に耐えない。ＳＰ158：弥生終末期前後の高坏脚部(**64**)。ＳＰ160：弥生後期後葉の有段高坏(**63**)。ＳＰ162：弥生後期後半の有段高坏(**62**)。口縁部に外方へ突出する肥厚面を有しており、中国地方の高坏により近いタイプである。ＳＰ165：古墳前期前半の小型甕または鉢の底部(**53**)、短頸壺(**59**)。ＳＰ214：弥生中期後葉の鋤先形口縁甕(**43**)、鋤先形口縁広口壺(**55**)。**43**は強い回転ヨコナデによって作出された擬突帯を頸部下に有する。**55**は赤彩が施され、口縁部には列点文を有する。ＳＰ252：古墳前期初頭前後の坩形ミニチュア土器(**72**)。ＳＰ258：弥生後期後葉の脚付鉢(**65**)、鉢形の手捏ね土器(**76**)。ＳＰ275：弥生後期後葉～末の鉢(**70**)鉢形の手捏ね土器(**75**)。ＳＰ372：弥生終末期の中型甕底部(**48**)

（７）その他の土器･土製品（Fig.32）

遺構出土以外の土器・土製品をFig.32に示す。縄文中期の阿高式系土器が出土しており、３点図示する(**78**～**80**)。**78**はＳＫ04出土の口唇部に波状のキザミ目を有する深鉢口縁破片である。**79**(ＳＫ04出土)･**80**(ＳＰ15出土)は外面に凹線文を有する胴部破片である。これらはいずれも胎土中に滑石を多量に含んでいる。**81**は弥生前期の如意形口縁甕である。Ｂ区遺構検出面出土。**82**は古墳前期前半の山陰系有段口縁甕である。Ｂ区遺構検出面出土。**83**は弥生中期後葉の袋状口縁壺である。Ｂ区遺構検出面出土。**84**は弥生後期後半の有孔鉢または甕である。Ｃ区遺構検出面出土。**85**は古墳前期の在地系鉢である。ハケ調整後に口縁の粘土紐をナデ付けている。Ｂ区遺構面出土。**86**は弥生終末期前後の器台である。口縁端面にハケメと同一の工具による列点文が施される。Ａ区遺構検出面出土。**87**は

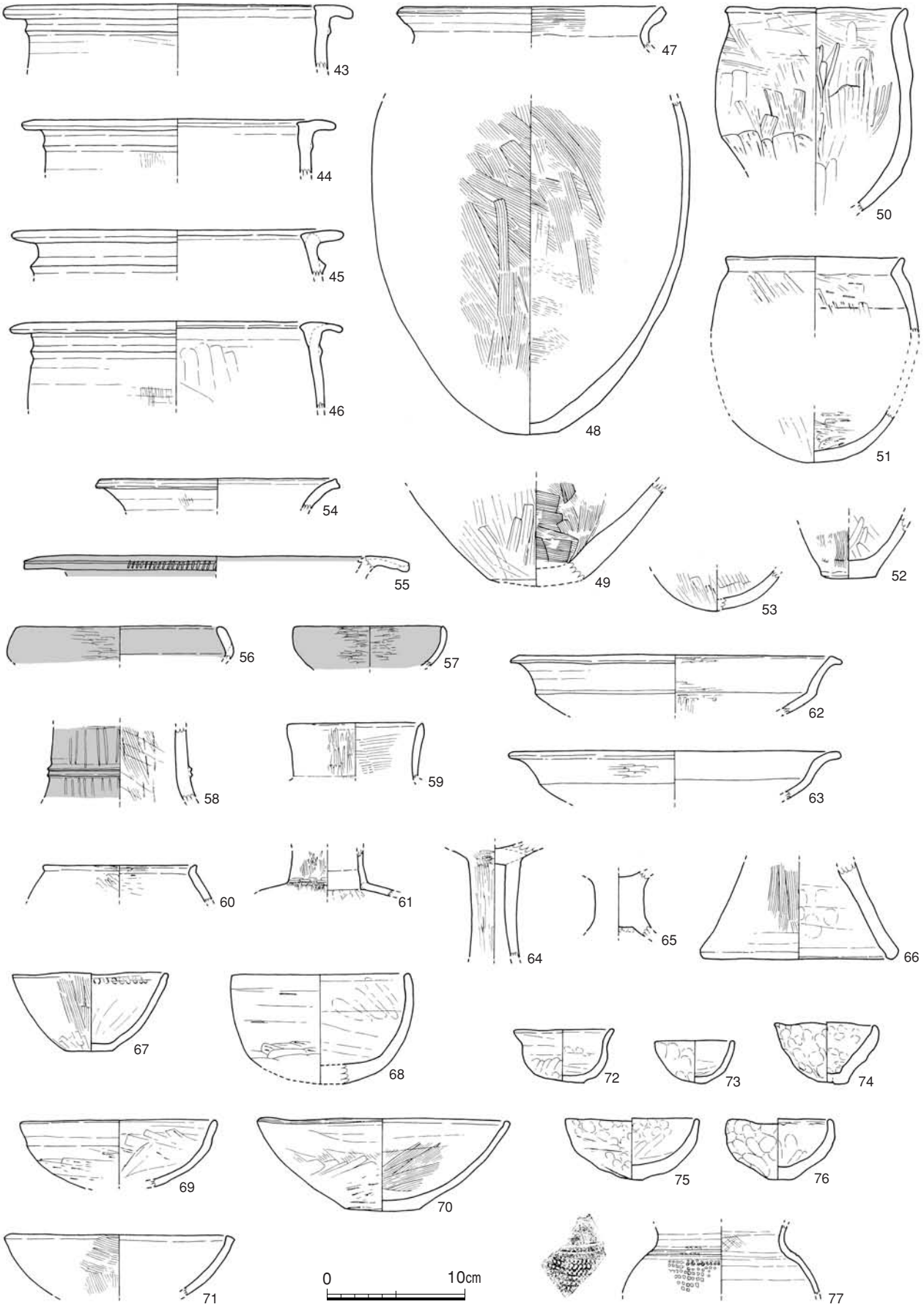


Fig.31　ピット出土遺物実測図　(1/4)

Ph.35　その他の出土遺物　（72～76:約1/2、他:約1/4）

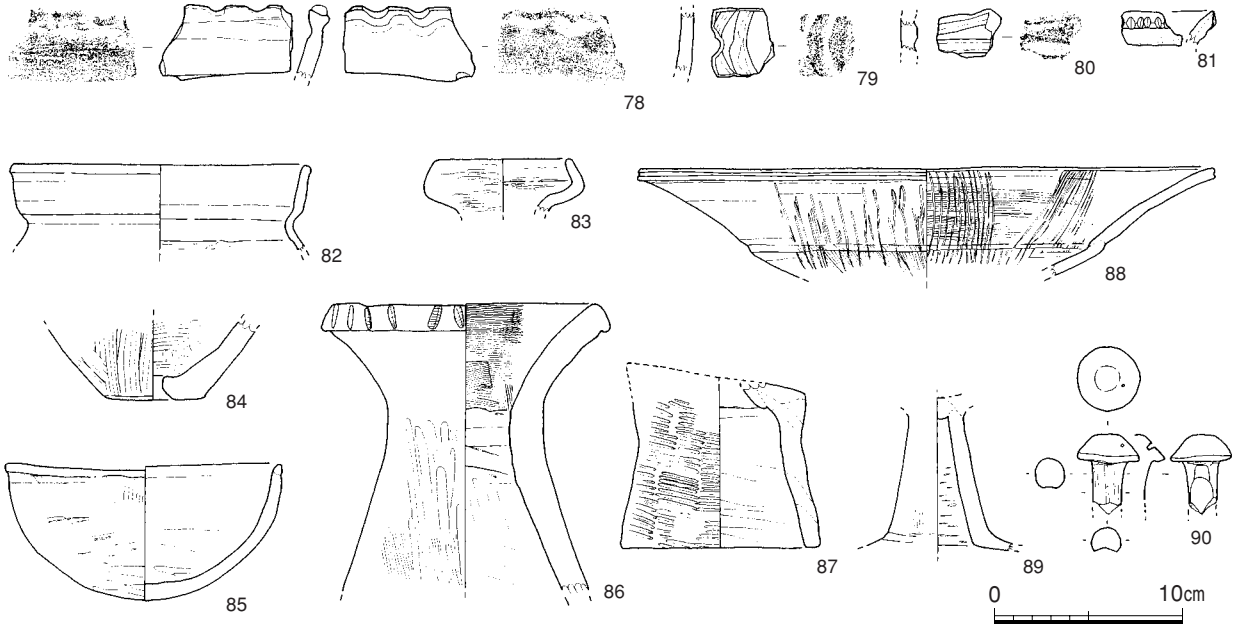
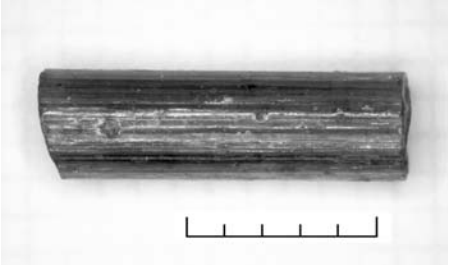


Fig.32　その他の土器・土製品実測図　（1/4）

弥生後期後半～終末期の支脚である。C区遺構検出面出土。**88**は古墳前期初頭前後の高坏坏部である。内外面に暗文を有する。C区遺構検出面出土であるが、ＳＰ41の高坏口縁小片はこれと同一個体である可能性が高い。**89**は古墳前期後半の高坏脚である。C区遺構検出面出土。**90**はC区撹乱出土の土製品である。棒状部で欠損しているが現状では笠形を呈している。ミガキ･ナデ調整で胎土中には砂粒が少ない。笠部にみられる小孔は意図的なものかどうか定かでない。棒状部には不整面であるが匙面が作出されている。時期不明。新しいものかもしれない。

（８）石器・石製品・ガラス製品（Fig.33、Ph.36）

石器・石製品・ガラス製品を遺構内・遺構外出土ともまとめて示す。**91**はサヌカイト製の石鏃。ＳＫ30出土。**92**は石剣の先端部。粘板岩製で風化が激しくもろい。ＳＫ40出土。**93**は打製石斧の基部である。今山産と思われる安山岩製。ＳＴ31甕棺内より出土したが、流入であろう。**94**は滑石製の石錘である。ＳＰ118出土。**95**～**98**は砂岩製の砥石である。**95**は４面使用している。ＳＰ227出土。**96**は使用でかなりすり減っている。４面使用。ＳＫ25出土。**97**は大型の砥石である。磨面はくぼんでいる。側面に小孔があるが、人為的なものか不明。Ｂ区の表土除去時出土。**98**は現状で３面の使用が認められる。Ｂ区遺構検出時出土。**99**はガラス製の管玉である。残存長9.95mm、径3.15mm、重さ0.1ｇ。濃いコバルトブルーを呈する。ガラスを引き延ばしたときの痕跡である細い筋が表面に多数観察される。整理時のミスで正確な出土遺構が不明になってしまったが、Ｃ区のピットから出土している。福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏の蛍光Ｘ線分析により、カリガラスと分類された。また、コバルトも微量検出され、これが発色の原因であろう。また、マンガンも多く含まれており、これはコバルトと同じ由来である可能性があるという。佐賀県二塚山遺跡26号土壙墓や前原市三雲・井原遺跡の井原ヤリミゾ2582、2583番地13号甕棺出土品に類例がある。



Ph.36　ガラス製管玉　（×5）

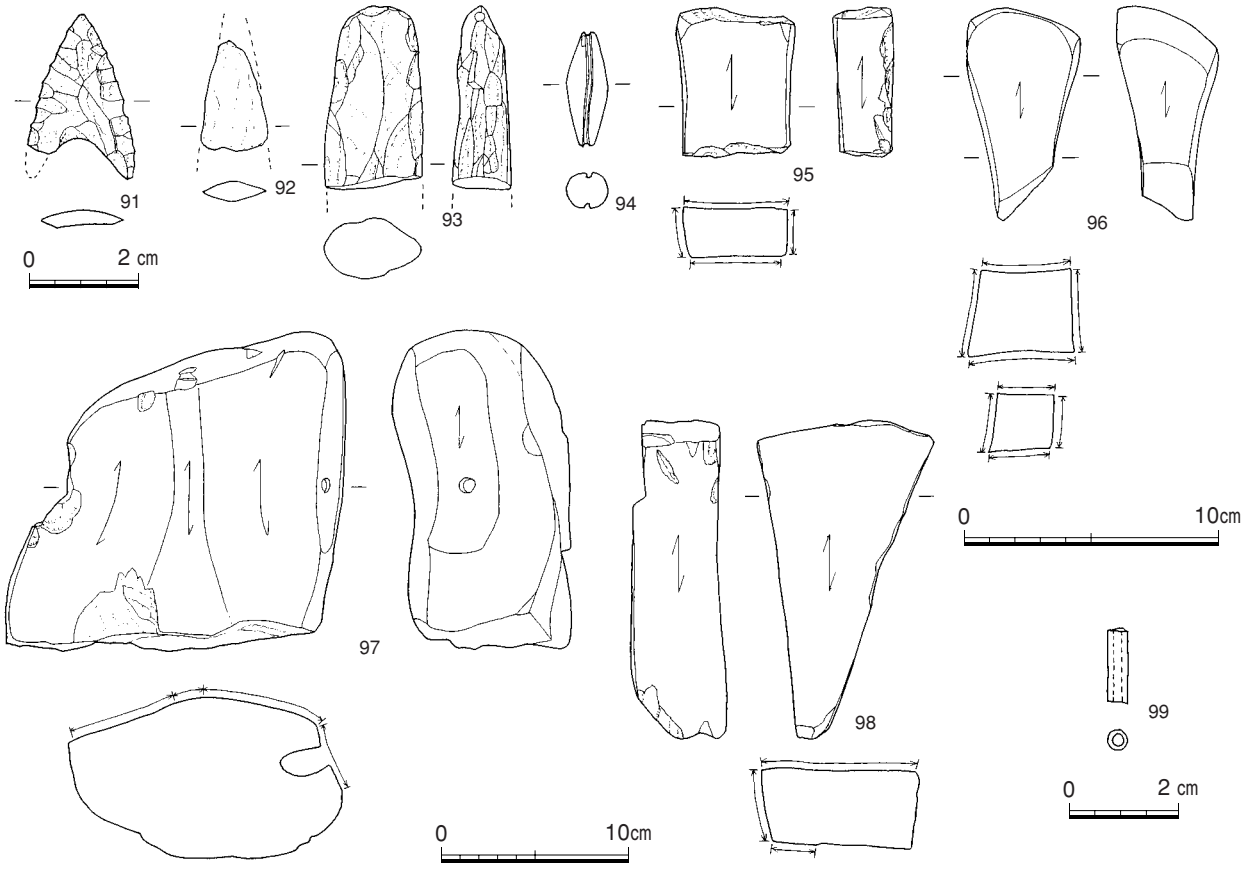


Fig.33　石器・石製品・ガラス製品実測図　（99:1/1、92:2/3、97･98:1/4、他:1/3）

Ⅲ　ま と め

弥生時代前期末～中期初頭の甕棺について

飯氏遺跡群の弥生時代前期末～中期初頭の甕棺については、宮井善朗氏による分類と編年があるので、それと対照してみたい（宮井 1994「弥生時代前期末～中期前半の甕棺について」『飯氏遺跡群 2』福岡市教育委員会）。ＳＴ36上棺の甕は器形、器壁の厚さ、口縁端面の明瞭な凹みと刻み、胴部沈線の明瞭さなど、今回の甕棺の中で最も古い型式と考えられる。セットになる下棺もこれと共通性の高い壺である。口縁部の内側への張り出しが大きいため、典型的な金海式よりは一型式下り、３類に該当するだろう。ＳＴ31は下棺の甕の器形や沈線に金海式の名残がみられるが、口縁部や底部の形態、器壁の薄さなどから４類に該当する。このＳＴ31に型式的に後続するのがＳＴ35であり、４～５類に該当する。ＳＴ27下棺の甕は胴部中位に突帯と沈線を有するが、頸部付近でややすぼまって口縁部にむけてゆるやかに外反する器形とみられるので、５類までは下らず、４類に該当すると考えられる。ＳＴ15上棺は亀の甲系の大甕であるが、器形からみて４類の時期と考えて大過ないであろう。

このように今回の甕棺は弥生時代中期初頭の４類を中心としている。金海式の要素をとどめるものが多いが、口縁部、底部形態や器壁の薄さなどに中期の甕棺の特徴があらわれている。一方、３次調査Ⅱ区に多くみられる１～３類はほとんどみられない。今回の調査地点は弥生時代前期末～中期初頭の甕棺墓域の北端と考えられるが、４類を中心とする時期における墓域の拡張が考えられる。

弥生時代中期～古墳時代前期の集落と土器について

出土遺物は弥生時代中期後葉～古墳時代前期の土器が中心であり、須恵器は脚部小片（方形透孔周辺部）が１点出土しているにすぎない。まとまった出土量のある一括資料としては、ＳＫ05の弥生時代後期前葉の土器群とＳＸ16の弥生時代終末期の土器群がある。弥生時代中期後葉のこのような一括資料はみられないものの、総量は少なくなく、９次調査で明らかになった当該期の環濠？集落域に包括されるものと考えられる。外来系土器としては、弥生時代後期前葉～中葉の瀬戸内東部系高坏脚部（**14**）、古墳時代前期のＶ様式系土器底部（**11**・**12**）、山陰系甕口縁（**82**）などがあり、口縁に肥厚面を有する有段高坏（**62**）や大孔径の透孔を有する脚部（**30**、器台か）なども、瀬戸内など外来的影響の強い弥生時代後期の土器と考えられる。さらに特筆すべき土器として、韓半島系陶質土器（**77**、格子目タタキの小型短頸壺小片）がある。糸島地域東部では、主として今宿遺跡群や今山遺跡に韓半島系土器の出土がみられ、時期は古墳時代初頭前後を中心としている（久住猛雄　2006「『博多湾貿易』の成立と解体」『流通・交換の諸相　考古学研究会第52回総会発表要旨』）。一方、楽浪系土器の集中的な出土で知られる糸島中心地の三雲遺跡群では、当該期から半島系土器の出土が激減しており、対外交易の窓口に大きな変化があったとされる（久住前掲）。これらの遺跡群の中間地点に位置する飯氏遺跡群では初例となるので、糸島地域における対外交易のあり方を考える上で貴重な資料となるであろう。

ガラス製管玉について

弥生時代のガラス管玉と勾玉を研究した小寺智津子氏の分類（小寺 2006「弥生時代のガラス製品の分類とその副葬に見る意味」『古文化談叢』55）によれば、本例は「CD 二塚山タイプ」（カリガラス、青色系統、円筒状細身、引き伸ばし技法で中空管を製作し各個体に切断）に該当する。ガラス管玉の多くは舶載品との理解である。類例としては二塚山26号土壙墓（221点以上）や井原ヤリミゾ13号甕棺（５点）など、弥生時代後期の副葬品がある。また、糸島地域ではこのような管玉を素材にしたと考えられる小玉が多量に出土している（比佐陽一郎 2006「ガラス製玉類の科学的分析」『三雲・井原遺跡』前原市教育委員会）。飯氏の本例は時期不明のピット出土であるが、上記の事例から弥生時代後期の所産である可能性が高いであろう。

報告書抄録

ふりがな	いいじいせきぐん　4
書　名	飯氏遺跡群　4
副書名	第10次調査報告
巻　次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	922
編著者名	田上勇一郎・森本幹彦
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神１丁目８－１　TEL　092-711-4667
発行年月日	西暦2007年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)				
いいじいせきぐん 飯氏遺跡群	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくおおあざいいじ 西区大字飯氏 876-1 876-1	40130	0685	33° 34′ 14″	130° 14′ 54″	20050413 ～ 20050629	928	公民館改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
飯氏遺跡群	散布地	縄文			縄文土器 石器	
	墓地	弥生	甕棺墓 土壙墓・木棺墓 甕棺抜き取り坑	5 5 1	甕棺	
	集落	弥生～ 古墳前期	掘立柱建物 土坑 溝 ピット	6 22 1 多数	弥生土器 土師器 陶質土器 ガラス製管玉	

飯氏遺跡群 4

－第10次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第922集

2007年３月30日

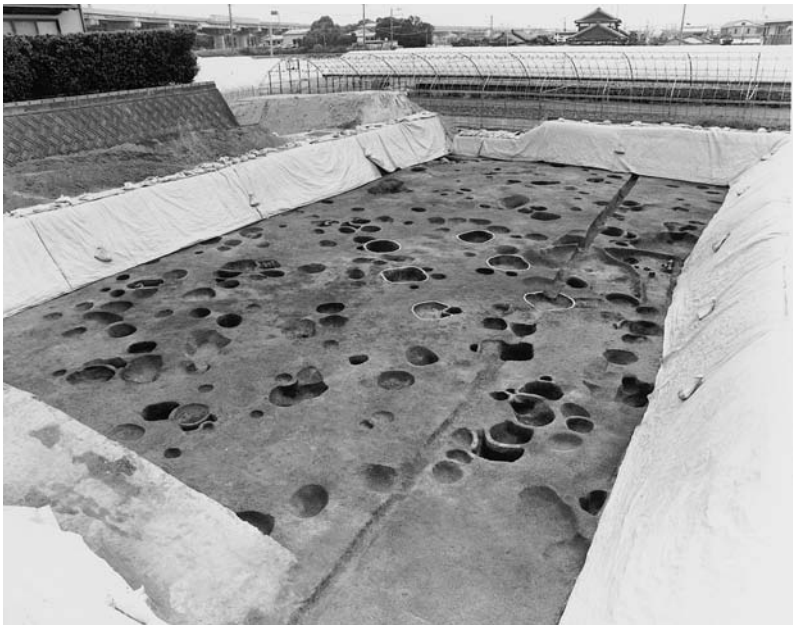
発　　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１-８-１

印　　刷　松影堂印刷株式会社
福岡市博多区吉塚５-13-40

IIJI SITES 4

－ Results of the 10th excavation of Iiji sites －

Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.922



2 0 0 7

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY